

# 研究紀要

第15号

1999

財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

# 研 究 紀 要

第 15 号

1999

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

# 目 次

## [論文]

- 東飼路式系土器へのモノローグ ..... 谷井 彪 ( 1 )
- 埼玉県における低地の周溝墓と建物跡 (2) ..... 福田 聖 ( 35 )  
— 周溝墓とは何かを探るための試み —
- 弥生・古墳時代と神仙（道教）思想 ..... 中村 倉司 ( 73 )
- 北陸系装飾器台の系譜についての小論 ..... 利根川章彦 (101)  
— いわゆる「特殊な器台」について —
- 武藏寺谷廃寺の研究 ..... 昼間 孝志 (117)  
木戸 春夫  
赤熊 浩一

# 埼玉県における低地の周溝墓と建物跡（2）

—周溝墓とは何かを探るための試み—

福田 聖

**要約** 埼玉県内の弥生時代後期から古墳時代前期の低地において、これまで周溝墓とされていた遺構の大半が周溝を有する建物跡であるという指摘が及川良彦氏、飯島義雄氏からなされた。筆者はそれを受け、低地における周溝墓と建物跡を分けるために、両者を認定する作業に着手した。その結果、①直線的な辺を持つ方台部、②周溝が全周あるいはコーナーの一つに陸橋部を持つか四隅切れの平面形、③施設としての溝中土坑、④壇の出土比率の高さ、⑤出土土器の完形率の高さ、⑥コーナーや陸橋部際、特定の周溝からの土器の出土、⑦整然とした群在のあり方のいずれかが認定のある程度の目安となることが明らかになった。しかし、一方で認定の条件と言えるようなものや全ての要素を併せ持った完璧な周溝墓は存在せず、周溝墓の造墓や死者儀礼が、厳密に規格化された定型的なものではない、常に揺れ動く曖昧なものであることも明らかになった。従って、周溝墓の様々な検討のために、一つの墓として機能している周溝墓のある時期の具体的な例を積み重ねる必要がある。周溝墓の曖昧さを何か他の厳密なものに置き換えるのではなく、整理し検討することが重要である。本稿はその第1歩である。

## 1.はじめに

從来埼玉県域の低地部で方形周溝墓として報告してきた遺構に対して、及川良彦氏、飯島義雄氏から「周溝を有する建物跡」ではないかという疑義が提起された（及川1998、飯島1998）。筆者はその疑義を受けて、「周溝墓」と「周溝を有する建物跡」の相同と相異を明らかにするために作業を始めた。既に低地部の周溝墓の可能性が高いものについて概観し、様相をとりまとめている（福田1998）。本稿はその作業の続編に当たるもので、台地の周溝墓について概観し、様相をとりまとめ、低地の周溝墓との相同と相異について述べるものである。

## 2.台地・丘陵の周溝墓

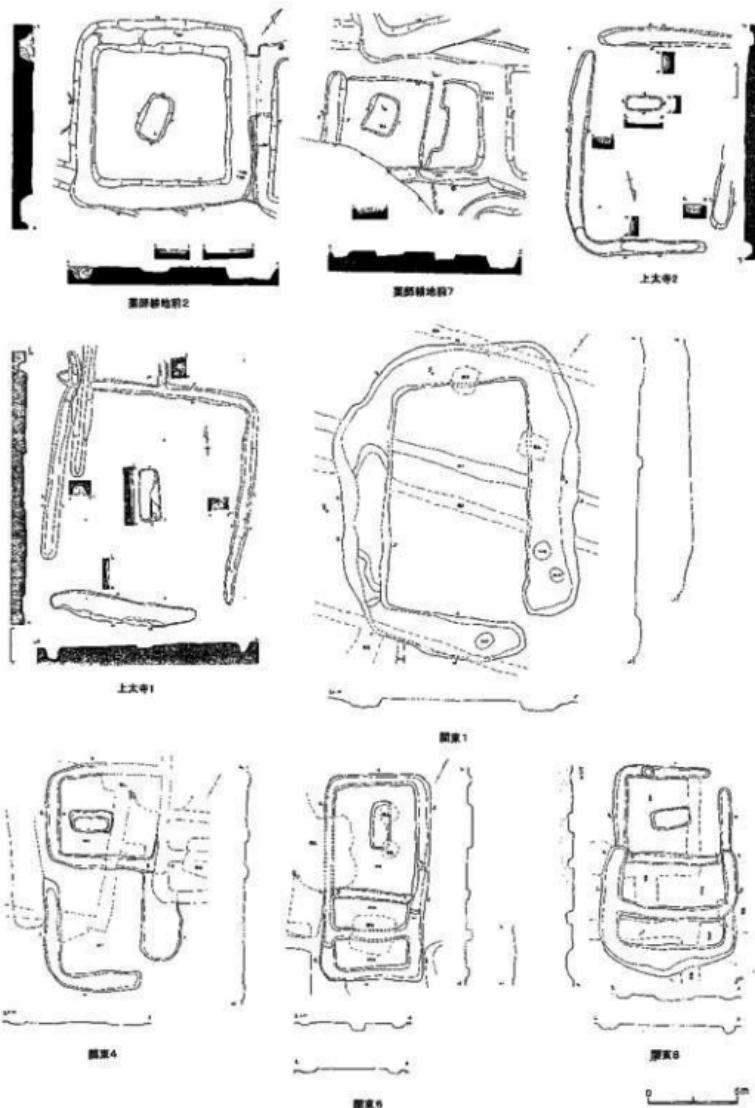
### (1) 大宮台地の周溝墓

#### 個々の周溝墓

荒川低地に接する大宮台地では、方台部が削平されているものの主体部が遺存するものや副葬品的な遺物が出土するもの、底部穿孔壺が出土するものなど、荒川低地に比して良好な例が多く見られる。

上尾市薬師耕地前遺跡、与野市上太寺遺跡、同関東遺跡、大宮市篠山遺跡、浦和市井沼方遺跡では埋葬主体部が検出されている。

上尾市薬師耕地前遺跡（赤石1978、第1図）は荒川に西面する南北を荒川に注ぐ小河川により隔てられた小舌状台地上にあり、同時期の集落である稻荷台遺跡が至近にある。



第1図 大宮台地の良好な周溝墓(1)（各報告書より転載、S = 1 : 320）

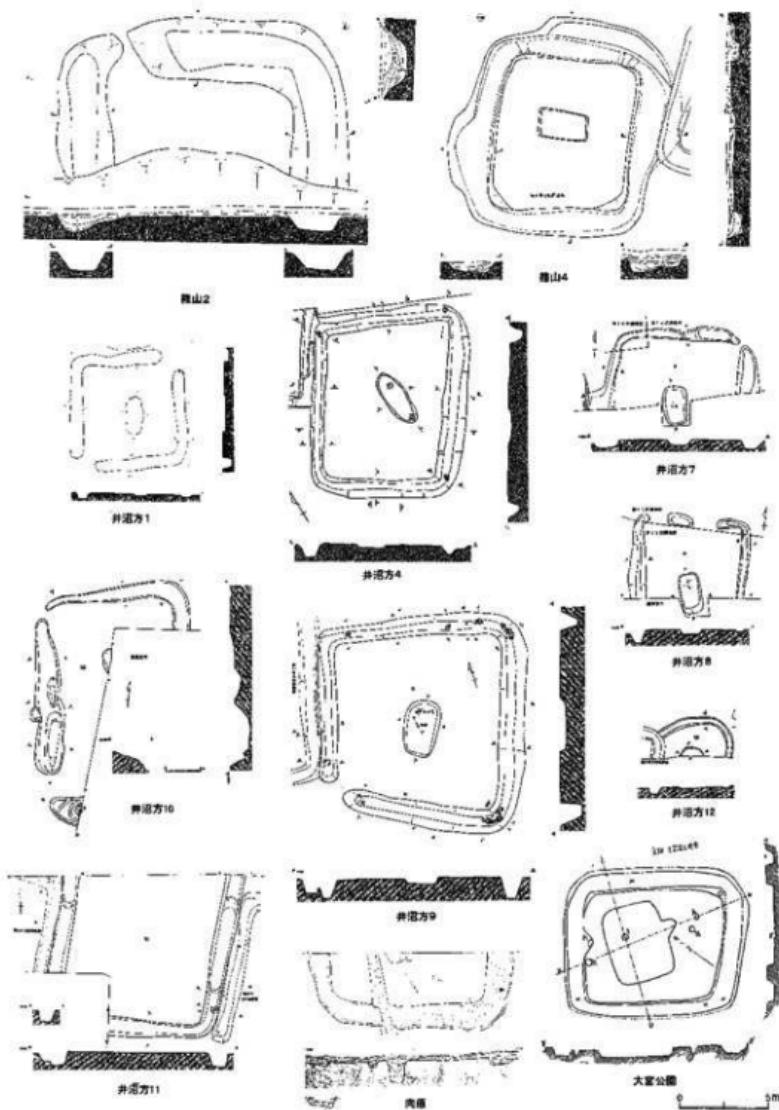
2号周溝墓は全体の平面形は整った正方形で、周溝が全周する。方台部は方形で、規模は8.1m四方である。主体部は2.8m×1.8mのやや不整な長方形で、深さは20cm～30cmほどである。周溝は幅1.4～2.0mで、各辺の中ほどがやや膨らみを持つ。北溝の西コーナー際に溝中土坑がある。深さは北溝がやや深いが、その他は平坦で80cmほどである。遺物は主体部からガラス玉11点と台付壺の破片が、北溝中央の確認面直下から壺が、東溝の底面からやや浮いて壺、台付壺が出土している。東溝のものについて、赤石氏は据え置かれたとしている。器種は壺・小型壺・台付壺・高壺・壺がある。底部穿孔壺は出土していない。時期は3期である。

7号周溝墓は、1号周溝墓と東溝を共有する。全体の平面形は直線的で、整った正方形であったものを長方形に拡張している。当時のもの（以下第1次と呼称）は周溝の北西に陸橋部が設けられている。拡張したもの（以下第2次と呼称）は周溝が全周する。規模は当初5.2m四方であったものが東に拡張され、8.2m×5.2mになっている。主体部は第1次、第2次それぞれに造られ、第2次のものは第1次の東溝を切っている。規模は第1次のものが2.3m×1.7mのやや不整な長方形で、深さは20cmほどである。第2次のものは2.7m×1.3mのやや不整な長方形で、深さは40cmほどである。周溝は南溝と第1次の東溝がやや細く幅80cm、北溝がやや太く1.5m、共有する東溝は1.9mである。深さは東溝がやや深く60cm、北・東溝は30cm、南溝は30cm程の深さから段を持って深くなり東溝に続く。遺物は第1次主体部から鉄劍と管玉が、第2次主体部からガラス玉4点、管玉の破片1点が出土している。周溝からのものは遺構の東側、溝底からやや浮いて出土するものが多い。南北の溝の東寄りと東溝の北東コーナー附近から壺が、南溝中層の方台部に接して高壺が出土している。赤石氏はいずれも据え置かれたとしている。器種は壺・小型壺・高壺・器台がある。焼成前穿孔の壺底部破片が2点、焼成後の底部穿孔壺が1点出土している。時期は3期である。

与野市上太寺遺跡（奥村・秦野1989、第1図）は涌和・大宮支台の西縁、鴻池低地を臨む位置にある。遺跡は後期の大規模な環濠集落として知られる中里前原遺跡群の一部である。

1号周溝墓は、3号周溝墓が北側に接続して造られ、1号濠（環濠）によって切られている。全体の平面形は長方形である。南側に2個所の陸橋部がある。方台部は整った長方形である。規模は12.0m×10.3mである。主体部は3.3m×1.2mの長方形で、深さは20cmほどである。周溝は北・東・西溝が細く幅60cm～1.0m、南溝が広く幅80cm～1.7mほどである。深さは南溝が浅く20cm、西溝が深く90cmで、南溝を除き断面形は逆台形である。底面はほぼ平坦である。主体部、周溝双方の覆土の最上層から焼土が出土している。遺物は主体部と周溝から壺の破片が出土している。南溝の東寄りからは底部穿孔壺が正位の状態で出土している。時期は2期と考えられる。

2号周溝墓は、1・3号の西側にやや離れて造られている。西溝の大部分と南溝の西側は未調査である。全体の平面形は歪んだ長方形で、方台部も同様である。北西と南東の2個所の陸橋部がある。規模は長軸が11.2m、短軸が8.0m以上になると考えられる。主体部は2.4m×90cmの長方形で、深さは20cmほどである。周溝は幅80cm～1.3m、深さは東・北溝が浅く30cm、西・南溝が深く50～60cmである。底面はほぼ平坦である。主体部、周溝双方の覆土の最上層から焼土が出土している。主体部からはガラス小玉43点と齒、骨粉が出土している。東溝の南端からは台部が打ち欠かれた台付壺が出土している。時期は2期である。



第2図 大宮台地の良好な周溝墓(2) (各報告書より転載、S = 1 : 320)

与野市関東遺跡（大谷1998、第1図）は浦和・大宮支台の西縁、鴻池低地を臨む位置にある。中里前原遺跡群の北方約2kmになる。関東遺跡では4・6・8号周溝墓で主体部が検出されている。

4号周溝墓は、3号周溝墓が南側に接続して造られるもので、5・6号周溝墓に切られる。全体の平面形は長方形で、周溝は全周するが、3号周溝墓も含めると2ヶ所の陸橋部があることになる。方台部は長方形である。規模は5.7m×4.6mである。主体部は2.5m×1.2mの長方形で、深さは20cmほどである。周溝はほぼ同規模で幅70cm～80cm、深さ15～25cmである。断面形はU字形で、底面はほぼ平坦である。周溝の覆土から焼土が若干出土している。遺物は出土していない。他の周溝墓との関係から時期は2期と考えられる。

6号周溝墓は、5号周溝墓が南側に接続して造られるもので、3・4号周溝墓を切って築造される。全体の平面形は長方形で、周溝は全周する。方台部は長方形で、規模は6.2m×4.6mである。主体部は2.8m×1.1mの長方形で、深さは35cmほどである。周溝は東・南溝が細く幅60cm、北・西溝が太く幅90cmで、深さも同様に東・南溝が浅く10cm、北・西溝が若干深く25cmである。断面形はU字形で、底面はほぼ平坦である。南東コーナーに5号周溝墓に伴う浅い溝中土坑がある。主体部・周溝の覆土に焼土が若干認められる。遺物は主体部から壺の頸部破片が1点出土したのみである。他の周溝墓との関係から時期は2期と考えられる。

8号周溝墓は、9号周溝墓が東側に接続して造られるもので、北西側約2mに2・3号周溝墓がある。全体の平面形は長方形で、北西コーナーに陸橋部を持つ。方台部は長方形で、規模は5.4m×4.4mである。主体部は2.2m×1.2mの長方形で、深さは20cmほどである。周溝は東・西溝が細く幅60cm、北・南溝が太く幅90cmである。深さは北・東溝が浅く10cm、南・西溝が若干深く30cmである。断面形はU字形である。底面はほぼ平坦で、西溝に溝中土坑がある。周溝の覆土から焼土が若干出土している。遺物は出土していない。他の周溝墓との関係から時期は2期と考えられる。

大宮市猿山遺跡（笠森1988、第2図）は、大和田片柳支台の見沼の谷に南面する台地南縁部に立地する。

4号周溝墓は3号周溝墓に接して作られ、3号周溝墓に切られている。全体の平面形は北側と東側に張り出しを持つ不整な方形である。周溝は全周する。方台部は不整な長方形で、規模は8.2m×9.1mである。主体部は2.9m×1.7mのやや歪んだ長方形で、深さは60cmほどである。周溝は幅1.6mほどで、北側の張り出し部分が最も幅が広く、2.8mほどである。東側の張り出し部分は南側まで回りこむテラス状になっている。深さは1.0mほどで、東溝の北東と南東のコーナー部がやや浅くなっている。遺物はその北東コーナーのやや浅くなった部分から、ほぼ完形の壺が出土している。他に各溝覆土から壺、小型壺の小片が出土している。時期は3～4期と考えられる。

浦和市井沼方遺跡（山田1987、柳田・小倉1994、第2図）は浦和支台の南端の馬の背状の部分に立地している。遺跡の東側は見沼の低地になっている。

1号周溝墓は全体の平面形は整った正方形で、北東と南西の2箇所に陸橋部を持つ。規模は5.7m四方である。主体部は2.1m×1.0mの不整な長辺円形で、深さは15cmほどである。周溝は幅50cm～80cmで、深さは北溝・西溝が30cm、東溝が20cm、北溝がコーナー付近から徐々に深くなり60cmとなる。周溝底面は一面に焼土化している。遺物は壺の小片が出土しているのみである。時期は他の遺構と

の関係から1期と考えられる。

4号周溝墓は、3号周溝墓に接して造られ、3号周溝墓を切っている。全体の平面形は若干歪んだ長方形で、周溝は全周する。方台部は歪んだ長方形で、規模は9.3m×7.4mである。主体部は3.4m×1.4mのやや不整な長楕円形で、深さは25cmほどである。周溝は西溝が細く幅80cm、東溝が広く幅1.4mほどである。深さは西溝が浅く35cm、東溝が深く80cmである。北東・南西コーナーがやや浅くなる。方台部側の掘り込みはかなり急である。周溝底面は一面に焼土化している。遺物は、主体部からガラス玉が8点、南東コーナー、北西コーナーの上層から壺が3点、方台部から転落したと考えられる状況で出土している。時期は1期である。

7号周溝墓は、遺構の北半が調査されている。49号住居跡、13号周溝墓に接して造られている。調査区内の平面形は、隅丸方形である。北西コーナーに陸橋部を持つ。規模は東西方向で7.3mである。主体部は2.3m×1.4mのやや不整な隅丸方形で、深さは40cmほどである。周溝は北溝・西溝が細く幅40~60cm、東溝が広く幅80cm~1.4mほどである。西溝の13号周溝墓と接する部分が張り出しており、1.7mほどになっている。深さは北・西溝が浅く10~25cm、東溝が深く25~45cmである。北西コーナーがやや浅くなる。遺物は、主体部からヒスイの勾玉1点、磨製石斧1点、周溝からは土器の小片が出土している。時期は他の周溝墓との関係から1期と考えられる。

8号周溝墓は、10号周溝墓に接して造られ、13号周溝墓がやや間隔を置いて東にある。調査区内の平面形は、若干歪んだ方形である。北溝の2箇所に陸橋部を持つが、北溝の掘りこみが浅いために陸橋部状になった可能性もある。規模は東西方向で5.5mである。主体部は2.3m×1.2mの隅丸長方形で、深さは25cmほどである。周溝は北溝が分断されており1.5m×0.7m、深さ10cmの土坑状である。西溝は幅60cm~1.0m、深さは北に行くに従って浅くなり45~75cmである。東溝は幅40~60cmで、深さは北東コーナー付近で浅くなり10~40cmである。周溝底面は一面に焼土化している。遺物は、主体部からガラス玉が8点出土している。周溝からは土器の小片が出土している。時期は他の周溝墓との関係から1期と考えられる。

9号周溝墓は、第11号周溝墓に接して造られ、第11号周溝墓を切っている。全体の平面形は、歪んだ台形である。南西コーナーに陸橋部を持つ。規模は主軸方向の東溝側が10.5m、西溝側が8.8m、直交する軸方向で9.8mである。主体部は3.1m×1.8mのやや不整な隅丸方形で、深さは40cmほどである。周溝は11号周溝墓に接する西溝が細く幅1.0m、その他の溝はほぼ同様の幅で1.0m~1.4mほどである。深さは95cm~1.2mで、溝底はほぼ平坦である。南溝の南東コーナー付近がやや窪む。周溝底面は一部焼土化している。遺物は、主体部からガラス玉が13点と鉄剣が出土している。周溝からは、各コーナーと陸橋部両脇から壺が、北東コーナー、前述の南溝の南東コーナー付近、北西コーナーの上層、西溝の陸橋部の上層からは甕が、北溝の溝底からは片口鉢が、南東コーナーの中層からは勾玉が出土している。時期は1期と考えられる。

12号周溝墓は、遺構の北半分が調査されたもので、5号周溝墓に接して造られている。全体の平面形は、歪んだ円形に近い隅丸方形である。方台部も同様の形態で、規模は東西方向で3.5mと小型である。主体部は一部が調査されたのみで、東西方向で1.3mである。周溝は幅35~50cm、深さ10~20cmで、幅が狭く浅い。遺物は、周溝から土器の小片が出土しているのみである。時期は他の周溝墓

との関係から1期と考えられる。

以下は底部穿孔壺の出土により、周溝墓と考えられるものである。

伊奈町向原遺跡（浜野1984、第2図）は大和田片柳支台の北端、綾瀬川の低地に伸びる小支谷に臨む位置に立地する。1号周溝墓は調査区の南端で検出されたもので、東側に近接して2号周溝墓があり、集落が北側に展開している。北溝と東西の周溝の北半が調査されている。検出された全体の平面形は方形で、陸橋部は不明である。方台部は方形で、規模は東西方向で9.4mである。周溝はコーナーでやや狭くなるが幅1.3～1.5m、深さは20～40cmである。周溝の断面形は逆台形である。遺物は北東コーナーの上層から出土している。器種は壺、台付壺、高壺、小型壺で、壺1点に焼成後の底部穿孔が施されている。時期は2期である。

大宮市大宮公園遺跡（大護・柳田1952、大宮市1968、第2図）は大宮・浦和支台の東側、芝川に注ぐ小河川によって開削された谷に西面する。この周溝墓は、方形周溝墓が墓制として認識される以前に調査されたものである。全体の平面形は若干歪んだ長方形で、周溝が全周する。規模は8.5m×6.5mである。周溝は幅1.2～1.4mで、深さは40～50cmである。底面はほぼ平坦である。遺物は、方台部に位置する住居跡の床面からガラス玉2点が出土し、副葬品と考えられている。周溝からは、北西コーナー、南西コーナー、東溝の周溝底から壺2点、高壺2点が出土している。壺の内1点には焼成後の底部穿孔が施されている。時期は1期である。

与野市関東遺跡1号周溝墓（第1図）は、2～7号周溝墓の北側約5mに造られ、2号周溝墓と連結溝で結ばれる群中で最大規模のものである。全体の平面形は長方形で、南東コーナーに陸橋部がある。方台部は若干歪んだ長方形で、規模は13.7m×7.9mである。周溝は北・南溝が細く幅2.3～2.4m、東・西溝が広く東溝が幅3.0m、西溝が3.4mほどである。深さは北・南溝が浅く20～40cm、東・西溝が深く東溝が50cm、西溝は中央が段を持って深くなり80cmとなる。周溝の立上りは方台部側で急で、外周は緩やかである。覆土から焼土が出土している。遺物は上層からの出土が多く、特に西溝からは壺が細片の状態で焼棄されたと考えられる状況で出土している。また、南溝の陸橋部際からは台付鉢が焼棄された状態で出土している。特に2号周溝墓との間で接合関係が認められる土器がある点は注意される。器種は壺、台付鉢で、壺2点に底部穿孔が施され、その内1点には肩部にも穿孔が認められる。時期は2期である。

大宮市篠山遺跡2号周溝墓（第2図）は遺構の北半分が調査されている。全体の平面形はやや丸みを帯びた方形である。北西コーナーが陸橋部である。規模は遺存している東西方向で12.0mである。周溝は溝幅2.5～3.2m、深さは1.0～1.5mである。覆土の下層には焼土・炭化物が含まれる。遺物は北西コーナーの陸橋部北側に壺が2個体並んで出土し、内1個は焼成後の底部穿孔が施されている。北溝の陸橋部際からも2個体の壺がほぼ完形の状態で出土し、コーナーからは底部穿孔壺が出土している。東溝の中層からは平底壺が、方台部の斜面からは石製垂飾具が出土している。時期は3期である。

井沼方遺跡10号周溝墓（第2図）は、全体のほぼ4分の3が調査されたもので、8号周溝墓の西側に接して造られ、西側10mには10号周溝墓がある。全体の平面形は、若干歪んだ長方形である。北西・南西コーナーに陸橋部を持つ。方台部は西側が不整な長方形である。規模は調査された範囲

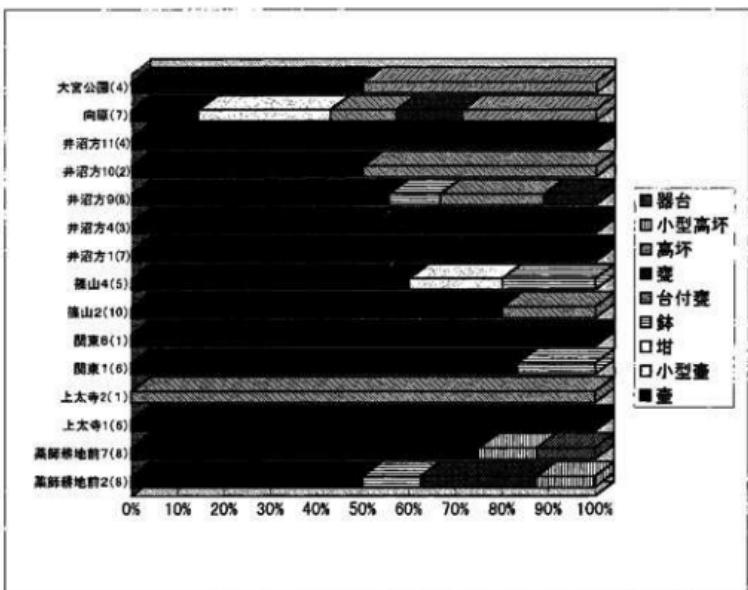
で11.1×6.8mである。方台部には主体部の可能性のある土坑がわずかに確認されている。周溝は幅が一定せず、最も細い北溝の陸橋部際で40cm、最も広い西溝の南西側と南溝の西側で1.6mである。深さは北溝が浅く25cm、東溝・南溝が深く1.0mである。溝中土坑が東溝に2個所あり、南側のものは溝底から更に50cm掘り下げられ、施設の可能性が高い。遺物は、南溝の最上層焼成後穿孔の壺が、西溝から高坏が出土している。時期は1期である。

11号周溝墓（第2図）は、全体のほぼ3分の2が調査されたもので、東西で9・14号と接して造られている。全体の平面形は長方形になると推定される。調査区内で陸橋部は認められない。方台部も長方形と考えられ、規模は東西方向で8.4mである。周溝は幅90cm～1.2m、深さは東西の溝の中央が段を持って深くなり70cm、その他は40cmほどである。西溝の一部の壁と底面が焼土化している。遺物は、南東コーナーから壺が出土している。底部の破片3個体には焼成後の穿孔が認められる。時期は他の遺構との関係から1期と考えられる。

以上をまとめると、全体の平面形は井沼方12号が円形に近い隅丸方形、篠山4号が不整方形である他は、整った方形・長方形である。周溝が周全するものや、コーナーの一つが陸橋部になるものが最も多い。方台部の規模（長軸）は最小の井沼方12号の3.5mから最大の関東1号の13.7mまで10mほどの開きがある。井沼方12号を除くと、大きく5～8mの薬師耕地前の2基、関東4・6・8号、井沼方1・7・8・12号、大宮公園と9～14mのそれ以外に2分できる。周溝の幅（最大）は、井沼方12号の50cmから関東1号の3.4mまで幅があり80cm～1.5m前後のものが多い。深さ（最深）は、篠山の2基と井沼方9号以外1mを上回るものはなく、大部分が50cm前後で、井沼方12号が20cm最も浅い。周溝内の施設は、溝中土坑、テラスが認められる他、井沼方1・4・7・8・9・11号で周溝の底面が焼土化している。溝中土坑は関東6・8号、井沼方10号のみで、井沼方10号は施設の可能性が高いものである。

遺物量は多寡があり、器種も多様である。主体部が検出されたものでも関東4・8号、井沼方7・8・12号のように全く遺物が出土していないものもある。遺物量の多寡と周溝墓の規模の相関は不明瞭である。出土土器の器種（第3図）は、台付壺が1点出土したのみの上太寺2号と向原遺跡の例を除き、壺が半数以上を占める。台付壺・甕の比率は小さく、1割程度にとどまっている。高坏は向原でやや多いが、他ではそれほどでもない。ここで見た大宮台地の例は1～3期にわたるが、時期による器種の偏りは認められないようである。底部穿孔は薬師耕地前7号、上太寺1号、関東1号、篠山2号、井沼方4・10・11号、向原、大宮公園で認められる。全体に出土量の少ない井沼方10・11号を除いて、出土土器の1～3割程度である。出土状況は多様だが、薬師耕地前7号、篠山4号、井沼方9号、向原、大宮公園ではコーナーから、上太寺2号、井沼方9号、関東1号、篠山2号では陸橋部際から出土している。多くは、破片でも大型のものである。

群在の様相（第4・5図） 大宮台地で周溝墓とされる遺構の群構成が分かる遺跡は、北から上尾市薬師耕地前遺跡、殿山遺跡（赤石1979）、大宮市上之宮遺跡（註1）、篠山遺跡、与野市上太寺遺跡、関東遺跡、浦和市井沼方遺跡等である。ここでは確実な周溝墓を含み、3基以上の群の様相が分かる上尾市薬師耕地前、与野市上太寺、関東、大宮市篠山、浦和市井沼方の各例について、特に群集の様相に限って見ることにしたい。



第3図 大宮台地の周溝墓出土土器の器種構成

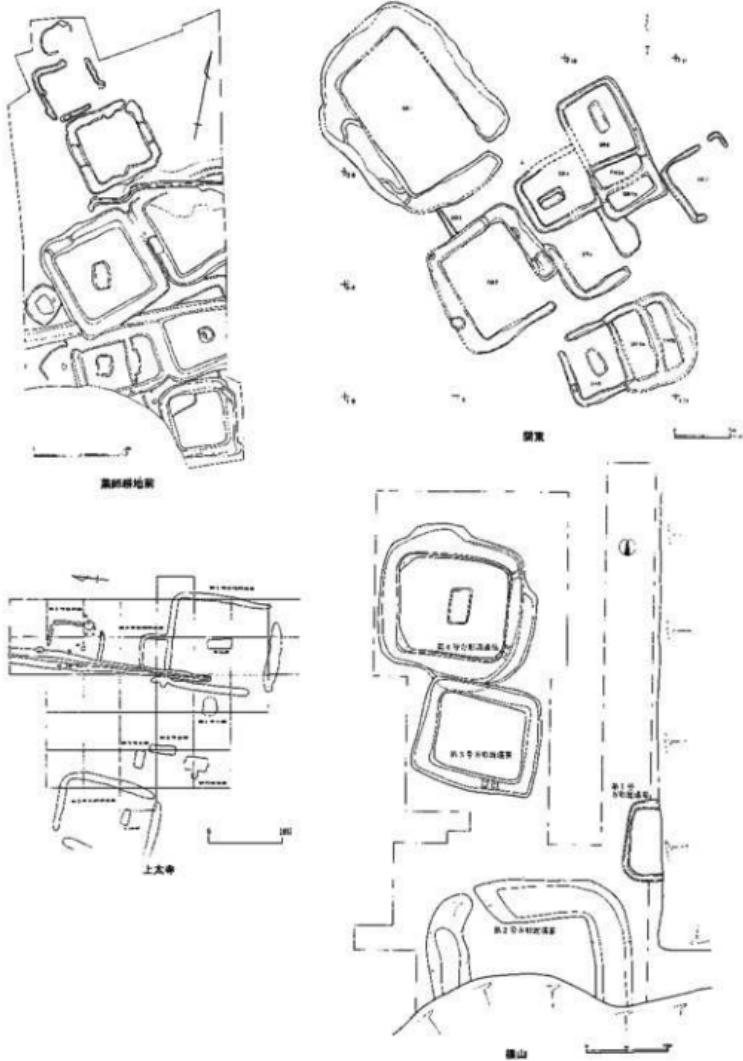
薬師耕地前遺跡では周溝墓とされる遺構が7基調査されている。時期は2・3期にわたり、継続した築造が考えられる。軸方位は北西—南東方向だが、調査区の北側の2~5号、南側の1・6・7号で若干異なっている。7号は拡張されたもので、2~3号、1~7号は東西の周溝を共有する。築造は大きく2回に渡って整然と行われたと考えられる。

上太寺遺跡は周溝墓とされる遺構が3基調査され、その内2基には主体部が認められる。時期は2期である。大きく1号とそれに接続して造られる3号の一組と、間隔を置いた2号の2つの群が認められる。長軸方向はほぼ同一だが、主体部を中心に考えれば1号と2号の軸方向は直交することになる。整然とした築造である。

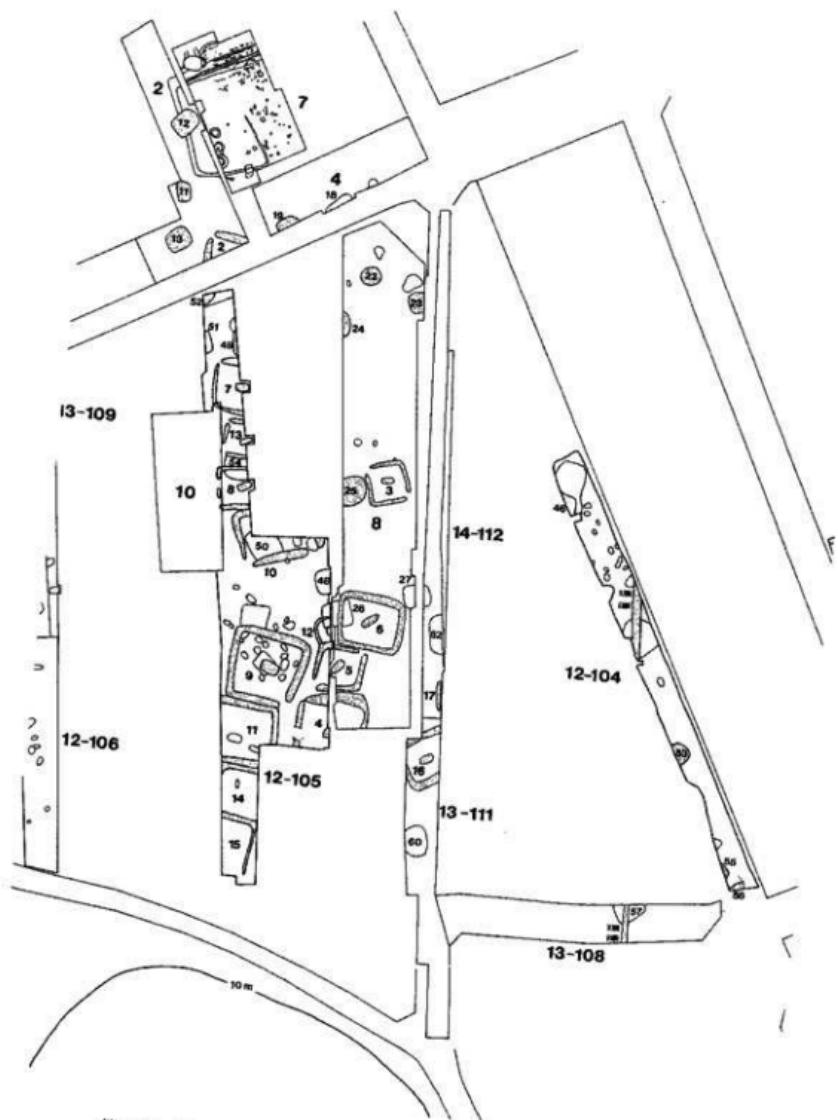
関東遺跡は周溝墓とされる遺構が9基調査されている。時期は出土遺物のないものが多く確実でないが、2期と考えられる。軸方位はいずれも北西—南東方向である。5号と9号は、各々4号と8号が拡張されたものである。一定の間隔を置いて、大きく1号と2~7号、8・9号の3群がある。2~7号は周溝を接するか共有している。大谷氏が述べるように、1・2・8号を起点とした整然とした築造が考えられる。

篠山遺跡は周溝墓とされる遺構が4基調査されている。時期は3~4期に渡る。軸方位は1・3・4号が北東—南西方向、2号が北西—南東方向である。1号と2号、3・4号は規模が異なり、間隔を置いて築造されることから、各々異なる群になるとと考えられる。整然とした築造である。

このように大宮台地の周溝墓群は、いくつかの群に分かれて整然とした築造が行われていると



第4図 大宮台地の周溝墓の群在の様相(1)（各報告書より転載）



第5図 大宮台地の周溝墓の群在の様相(2) (柳田・小倉 1994より転載)

言つていいだろう。

## (2) 比企地域の周溝墓

入西遺跡群を含む比企地域には大きく北比企丘陵、南比企丘陵とそれに挟まれる松山台地が含まれる。主体部が遺存するものや副葬品的な遺物が出土するもの、底部穿孔壺が出土するものなど、良好な例が多く見られる。しかし、そのほとんどが部分的な調査や未報告のものが多く、全容が知られるのは東松山市観音寺遺跡、下道添遺跡、嵐山町行司面遺跡などごく限られている。特に盛土が遺存し、周溝墓であるか古墳であるか議論が分かれる江南町塩古墳群についても、部分的な調査と測量のみで一部を除いて詳細については不明である。ここでは観音寺、下道添、行司免、塩古墳群の一部である諸ヶ谷の各遺跡について概観したい。

### 個々の周溝墓

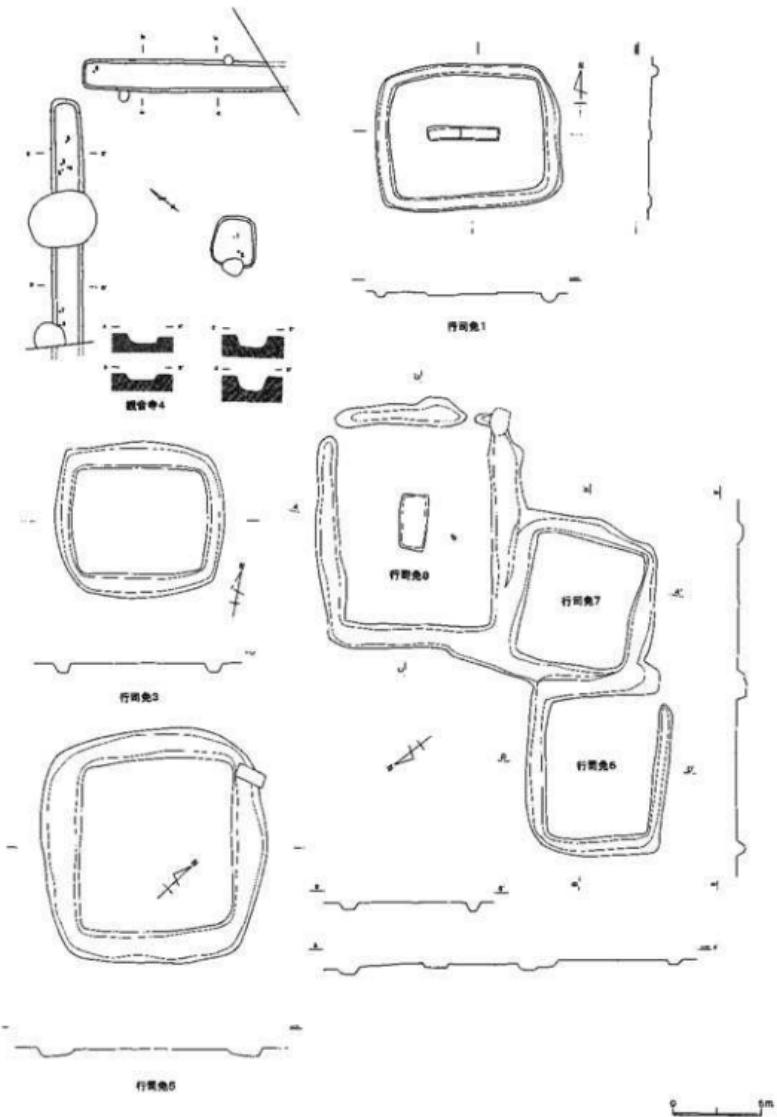
観音寺遺跡、行司免遺跡、諸ヶ谷遺跡は主体部が検出されたものである。

東松山市観音寺遺跡（宮島1995、第6図）は松山台地の北縁、市ノ川によって形成された低地に突出する舌状台地の先端に立地する。4号周溝墓は北西溝と北東溝が調査されたものである。宮島氏は調査部分と主体部の位置関係を手懸りに四隅の切れる形態で、一辺18m程度の規模と推定している。方台部は方形で、周溝の外側も直線的である。主体部は2.8m×2.5mのやや不整な隅丸方形で、深さは30cmほどである。周溝の規模を長さ、幅、深さの順に示すと北東溝が $11.0 \times 1.8 \times 0.4 \sim 0.6$ m、北西溝が $14.5 \times 1.8 \times 0.9$ mである。溝底は平坦である。遺物は主体部とそれぞれの周溝から出土している。主体部からは鉄剣と4輪が束ねられた銅鏡が出土している。周溝では、特に北西溝からまとまって壺、壺が出土している。器種は壺・壺で、底部穿孔は施されていない。時期は1期である。

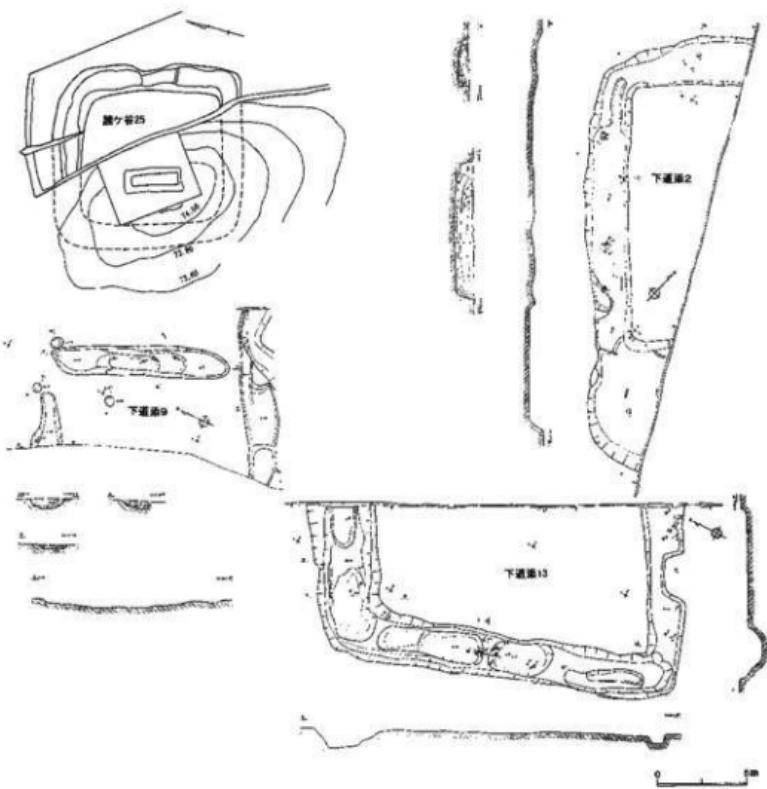
嵐山町行司免遺跡（植木1987、第6図）は松山台地の北縁、都幾川の低地に臨む独立丘状の台地上に立地している。1号周溝墓は周溝が全周し、各辺が丸みを帯びた隅丸長方形である。方台部は9.1m×7.4mの長方形である。主体部は4.2m×0.7mの長方形で、深さは20cmほどである。西側が若干深くなっている。周溝は幅0.6~1.0mで、深さは東溝が深く50cm、その他は20~30cmである。遺物は出土していない。時期は他の構造との関係から2~3期と考えられる。

8号周溝墓は7号に切られるもので、全体の平面形は長方形である。北東コーナーと東溝の南寄りに陸橋部を持つ。規模は $11.8m \times 9.3m$ である。主体部は $3.1m \times 1.6m$ の長方形で、深さは50cmほどである。周溝は南溝が広く2.1m、その他の溝は1.2~1.3mである。深さは西溝が浅く20cm、その他は40~50cmである。遺物は出土していない。時期は7号との関係から2期と考えられる。

江南町諸ヶ谷遺跡（江南町1995、第7図）は塩I支群の1基で、滑川を臨む丘陵頂部付近に位置する。25号は22号の北東にやや離れて造られるもので、1m余りの盛土が遺存している。遺構の東側が調査され、調査区内の全体の平面形は外周がやや不整な方形である。調査区内に陸橋部は検出されていない。方台部は方形で、規模は南北方向8.2mである。主体部は粘土構で、掘方が3.0m×1.5m、深さ25cm、棺部は $2.4m \times 0.6m$ の長方形で、深さは25cmほどである。周溝はほぼ同規模で幅1.6mで東溝の中央が狭まり、深さ30~50cm程度で平坦である。断面形は方台部側が急で、外側は緩



第6図 比企地域の良好な周溝墓(1)（各報告書・宮島 1995より転載、S = 1 : 320）



第7図 比企地域の良好な周溝墓(2) (各報告書より転載、S = 1 : 320)

やかである。周溝の覆土から焼土が若干出土している。遺物は主体部から鐵劍とガラス玉4点が出土している。土器は出土していないが、他の周溝墓との関係から時期は3~4期と考えられる。

以下は、底部穿孔壺の出土により、確実な周溝墓と考えられるものである。

下道添遺跡(坂野1987、第7図)は、松山台地の南東、市ノ川と都幾川によって形成された低地に挟まれた馬の背状の台地上に立地する。底部穿孔壺が出土する周溝墓が3基調査されている。坂野氏は2号墓を前方後方形と推定しているが、入西遺跡群の稻荷前遺跡B区5号、後述する塙本山14号の例等もあり、ここではとりあえず方形周溝墓として取り扱う。

2号墓は遺構の西側の一部が調査されたものである。周溝が全周し、南東溝が広くなっている。全体の平面形はやや歪んだ隅丸方形である。周溝の外側の形状はやや不整で、方台部は若干歪んだ方形である。規模は北西—南東方向で15.2mである。周溝の幅は北西溝が狭く2.3m、南西溝が2.4

m、南東溝が7.7mで、北西コーナーで狭く、1.6mである。深さは北西溝と南東溝が深く1.0m、南西溝が浅く40cmである。西コーナーが浅く、南東溝に段を持って深くなる。底面には凹凸があり、北西溝の外周側には不整形のテラスがある。覆土には焼土・炭化物が含まれる。遺物は南東溝中央と西コーナー周辺からまとめて出土している。南西溝の一群は、原位置を保ち、供獻されたものと推定されている。器種は壺・小型壺・器台・台付甕・甕である。壺5点には焼成前の底部穿孔が施されている。時期は3期である。

9号墓は遺構の東側が調査されたものである。8号墓の西溝と接している。全体の平面形はやや歪んだ方形である。北側と西側に陸橋部が設けられる。周溝の外側の形状はやや不整で、方台部は若干歪んだ方形である。規模は北西—南東方向で11.2mである。周溝の幅はほぼ同一で1.8m前後である。北西溝は陸橋部付近で細くなる。深さは北西溝と北東溝が深く50cm、南東溝が浅く20cmである。立ち上がりが10~20cmとごく浅く、中央に向かって深くなる。北東溝は中央に溝中土坑があり、土坑に向かって段を持って深くなっている。溝中土坑は施設の可能性が高いものである。遺物は北東溝中央の溝中土坑付近からまとめて出土している。溝底から20~30cm浮いて出土し、方台部からの流れ込みとされている。器種は壺・小型壺・高坏・台付甕・甕である。壺2個体には焼成後の底部穿孔が施されている。時期は3期である。

13号墓は遺構の西側が調査されたものである。1号墓の南側、12号墓の北側に位置している。全体の平面形は台形である。周溝は全周し、外周はやや不整で、西コーナー付近に張り出しが、南東溝に凹みが認められる。方台部は台形で、規模は北西—南東方向で16.4mである。周溝は北西溝、南西溝、南東溝の順に細く、順に幅3.8m、幅2.6~2.8m、幅2.2~2.5mである。深さは北西溝が最も深く1.3m、南西溝が0.8~1.1m、南東溝が60~85cmである。断面形から3~4工程の掘削が想定されている。北西溝・南西溝の底面には不整形の溝中土坑が連続してある。遺物は南西溝の中央の中層からまとめて出土し、方台部の崩落に伴うものと推定されている。器種は壺・小型壺・高坏・小型高坏・器台・台付甕・甕である。壺3個体には焼成後の底部穿孔が施されている。時期は3期である。

行司免遺跡では4基から底部穿孔壺が出土している。(第6図)

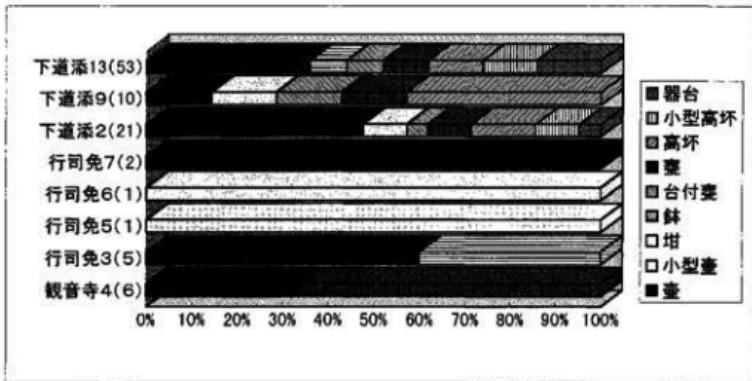
3号周溝墓は、2号の南東、4号の西側に一定の距離を置いて造られている。全体の平面形は各辺の中央がやや張る長方形で、周溝は全周する。方台部は若干歪んだ長方形で、規模は8.0m×6.4mである。周溝は東西の溝が細く幅1.0m、南北の溝が広く幅1.5~1.6mほどである。深さは50cmである。周溝の立上りは方台部側が急で、外周は緩やかである。断面形はほぼ逆台形である。遺物の出土状況は不明である。器種は壺・鉢で、壺1点に焼成後の底部穿孔が施されている。時期は3期である。

5号周溝墓は、4号の北東側に一定の距離を置いて造られている。全体の平面形は各辺の中央がやや張る長方形で、周溝は全周する。方台部は若干歪んだ長方形で、規模は10.6m×9.3mである。周溝は東溝が細く幅1.8m、その他の溝が幅2.1~2.4mである。深さは50cmである。周溝の立上りは方台部側が緩やかで、外周は急である。遺物の出土状況は不明である。小型壺1点が出土し、焼成後の底部穿孔が施されている。時期は3期である。

6号周溝墓は、7号と東溝を共有している。全体の平面形はやや歪んだ長方形である。南東コーナーに陸橋部が設けられている。方台部は歪んだ長方形で、規模は8.3m×6.6mである。周溝は南溝が細く幅80cm、北・西溝がやや広く幅1.1mである。東溝は広いようだが、共有のため不明である。深さは60cmほどで、底面はほぼ平坦である。周溝の断面形はほぼ逆台形である。遺物の出土状況は不明である。小型壺1点が出土し、焼成後の底部穿孔が施されている。時期は3期である。

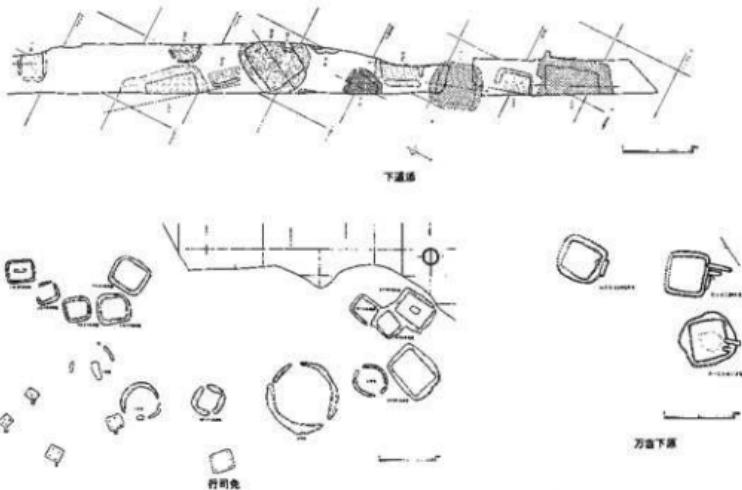
7号周溝墓は、6号と西溝を8号と北溝を共有する。6～8号の中で最も新しいものである。全体の平面形は不整な長方形で、周溝は全周する。方台部は歪んだ長方形で、規模は7.7m×6.4mである。周溝は南コーナーで細くなり幅80cm、東・南溝がやや広く幅1.3～1.4mである。深さは30～50cmで、ほぼ平坦である。周溝の断面形はほぼ逆台形である。遺物の出土状況は不明である。壺2点が出土し、内1点に焼成後の底部穿孔が施されている。時期は2期である。

以上をまとめると、平面形は整った方形・長方形と台形、隅丸あるいは各辺が丸みを帯びた方形がある。周溝は観音寺4号が四隅切れと推定され、行司免8号、下道添9号に不規則に2個所認められる他は、全周かコーナーの一つに陸橋部を持つものである。方台部の規模（長軸）は、最小の行司免7号の7.7mから下道添2号の15.2mまで7mほどの開きがある。大型の下道添2・13号を除くと大部分が8～12mほどである。周溝の幅（最大）は行司免1号の1.0mから下道添2号の南東溝の7.7mまで幅があり、1.5～2.5m前後のものが多い。深さは、50cm～1.3mで、50cm程度のものが最も多い。周溝内の施設は、溝中土坑、テラス、段が認められる。溝中土坑は下道添9・13号で認められ、9号のものは遺物が集中して出土し施設の可能性が高いものである。



第8図 比企地域の周溝墓出土土器の器種構成

遺物量は多寡があり、器種も多様である。行司免1・8号、諸ケ谷では遺物が出土していない。遺物量の多寡と周溝墓の規模の相関は不明瞭である。（註2）出土土器の器種（第8図）は、出土量の少ない行司免5・6・7号を除き、壺が3割から半数を占める。吉ヶ谷式の観音寺4号では、壺が7割程度となっている。高坏は3期の下道添で一定の割合を占めている。器台は下道添13号で多いのみである。底部穿孔は、観音寺4号を除いて遺物が出土した全ての例で認められ、個体数の少



第9図 比企地域・江南台地の周溝墓の群在の様相（各報告書より転載）

ない行司免5・6・7号等を含むことから不明瞭だが、全体の2～4割程度と考えられる。（註3）出土状況は多様で、下道添2号以外はコーナーからまとまって出土する様相は認められず、特定の周溝からの場合が多いようである。下道添2号では原位置を保ったと推定される一群が出土している。その他は、方台部からの転落、流れ込みが多いようである。

**群在の様相（第9図）** 比企地域で周溝墓とされる遺構の群在の様相が分かる遺跡は、北から東松山市古凍根岸裏遺跡（村田1981）、下道添遺跡、観音寺遺跡、嵐山町行司免遺跡、滑川町新井遺跡（木村1986）、大里村船木遺跡（出縄・富沢1992）、江南町塩西遺跡（新井1984）がある。ここでは確実な周溝墓を含み、3基以上の群の様相が分かる下道添遺跡、行司免遺跡について、特に群在の様相に限って見ることにしたい。

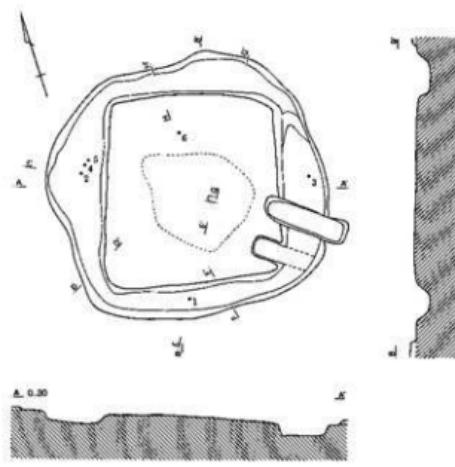
下道添遺跡は周溝墓とされる遺構が13基調査されている。時期は3期で一部4期に下る可能性があり、継続した築造が考えられる。2期の集落を壊して造られている。軸方位は北西—南東方向と北東—南西方向とがあり、後者は1例のみである。軸方位と平面形に相関は認められない。坂野氏が分析するように、築造は3つの群が互いに周溝を隣接させて整然と行われたと考えられる。

行司免遺跡は周溝墓とされる遺構が10基調査され、その内2基には主体部が認められる。大きく調査区の北側、北東側とその中間に3箇所に築造されている。時期は2～3期で、北東側の群が前に出する可能性がある。北側の一群は1基を除いて東西の軸方向、北東と中間の一群は北西—南東の軸方向である。6～8号は周溝を共有し、その他は一定の間隔を空けて造られている。整然とした築造である。

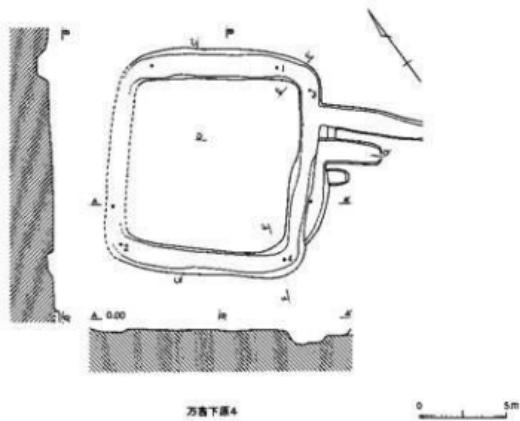
### (3) 江南台地の周溝墓

比企丘陵の北側に接する江南台地では、熊谷市万吉下原遺跡（駒宮・山川ほか1991・第10図）で、盛土の遺存する周溝墓が調査されている。遺跡は江南台地の北縁に立地し、南2kmには荒川が東流する。

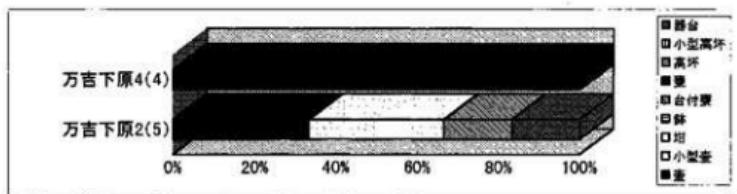
2号周溝墓は各辺が丸みを帯びた不整な隅丸方形である。周溝は全周するが全体的に浅く、外側



万吉下原2



第10図 万吉下原遺跡2・4号周溝墓（報告書より転載、S = 1 : 320）



第11図 江南台地の周溝墓出土土器の器種構成

の形状は不整で凹凸がある。方台部は不整な長方形で、規模は11.2m×10.4mである。盛土は方台部の中心に径11m、高さ約75cmの地彌れ状で遺存している。後世の耕作を受け著しく変形しており、主体部は検出されていない。方台部にロームの広がりが確認されたことから、駒宮氏は粘土床の埋葬施設と推定している。周溝は西溝が広く3.6m、南溝が狭く2.0mである。深さは西溝が浅く50cm、その他の溝は80cm前後である。遺物は、方台部から土錐が、西溝の張出し部から壺と壠がまとまって出土している。器種は壺・壠・鉢がある。時期は5期である。

4号周溝墓は整った方形である。周溝は全周する。方台部は方形で、規模は12.8m×11.7mである。盛土は方台部の中心に、径9.5m、高さ約50cmの地彌れ状で遺存している。後世の耕作を受け著しく変形しており、主体部は検出されていない。周溝はほぼ均等の幅で1.4~1.8m、深さ50~80cmである。東溝にテラスが設けられている。遺物は、壺4点が各コーナーを中心に出土している。時期は5期である。

周溝墓とされる遺構は3基調査されており、軸方向を若干違えるが、一定の間隔を置いて築造されている。

### (5) 児玉地域の周溝墓

児玉地域の丘陵上の周溝墓は山崎山、大久保山、生野山の独立丘陵上に立地するものが多い。

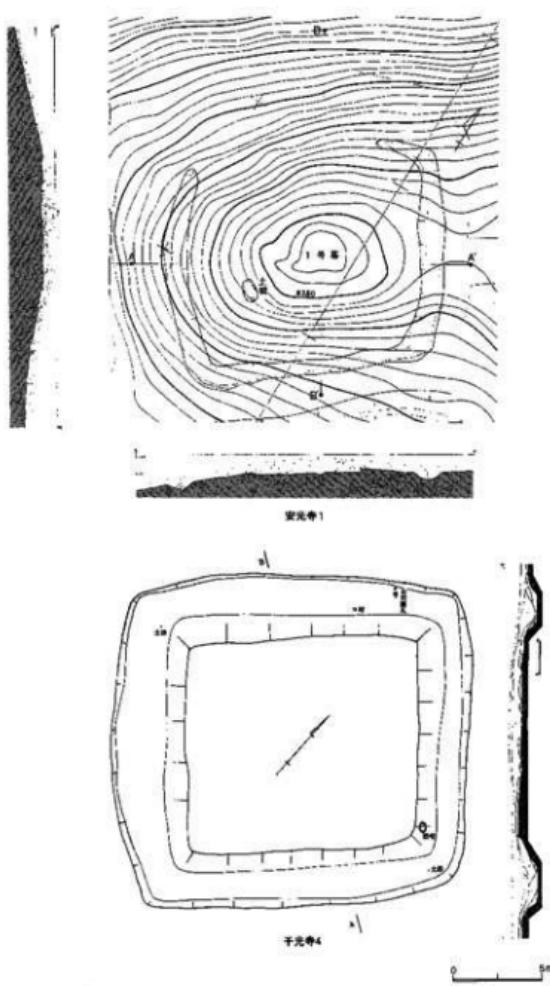
山崎山丘陵には、安光寺、千光寺の2遺跡があり、いずれも古墳群と同一の地点に立地している。山崎山丘陵は、利根川に注ぐ小山川の支流志戸川、藤治川の流れる本庄台地に囲まれている。塚本山遺跡は女堀川と志戸川に囲まれた大久保山に立地する。神流川の扇状地である本庄台地上には諏訪遺跡がある。

#### 個々の周溝墓

まず方台部の盛土が遺存する例を見ることにしたい。

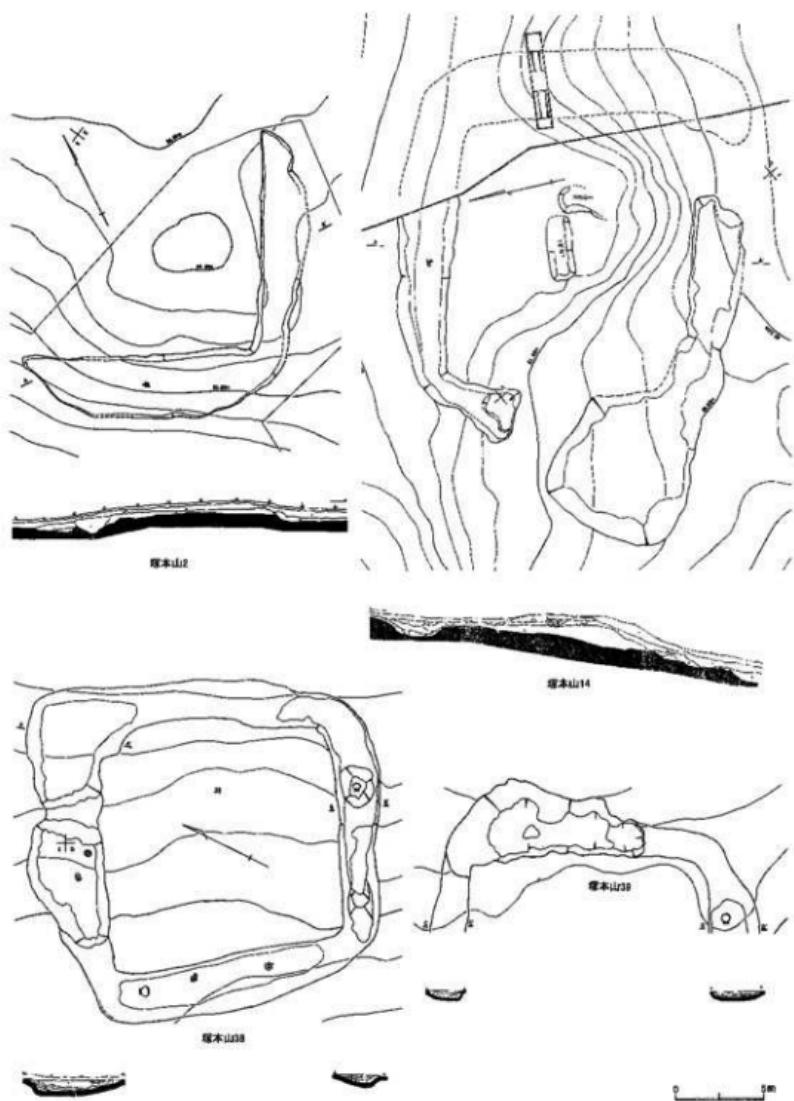
岡部町安光寺遺跡（増田1981、第12図）では、盛土と主体部が検出された周溝墓が1基調査されている。1号墓は東西にやや膨らむ隅丸方形で、方台部も同様の形態である。北側に陸橋部を持つ。規模は13.8m×11.6mである。盛土は方台部の中心に、径5m、高さ約70cmの地彌れ状で遺存している。主体部は南北側に土坑が検出されている。周溝は東西の溝が広く1.3m、南溝が狭く0.8mである。深さは南溝が浅く20cm、その他の溝は40cm前後である。遺物は、東溝から高坏が出土しているのみである。時期は5期もしくはそれ以後と考えられる。

岡部町千光寺遺跡（増田・市川1975、第12図）では、盛土と壺棺が検出された周溝墓が1基調査さ



第12図 児玉地域の良好な周溝墓(1) (各報告書より転載、S = 1 : 320)

れている。4号墓は整った方形で、周溝は全周する。方台部は方形で、規模は $15.8m \times 14.4m$ である。盛土は方台部の中心に、径10m、高さ約60cmの地彫れ状で遺存している。後世の耕作を受け著しく変形しており、主体部は検出されていない。周溝は西溝が広く幅4.2m、東溝が狭く幅2.7m、南北の溝は幅3.0~3.5mである。深さは1.5~2.0mで底面は平坦である。溝の立ち上がりは方台部側がなだらかで、外周が急である。東溝のコーナーに近い部分の方台部側に壺棺が埋設されている。壺棺は2個の土器を組み合わせている。中から算盤玉3、白玉4点が出土している。北溝では台付



第13図 児玉地域の良好な周溝墓(2) (各報告書より転載、S = 1 : 320)

壺と完形の壺が溝底から出土している。器種は壺、壺、台付壺である。時期は5期より後である。

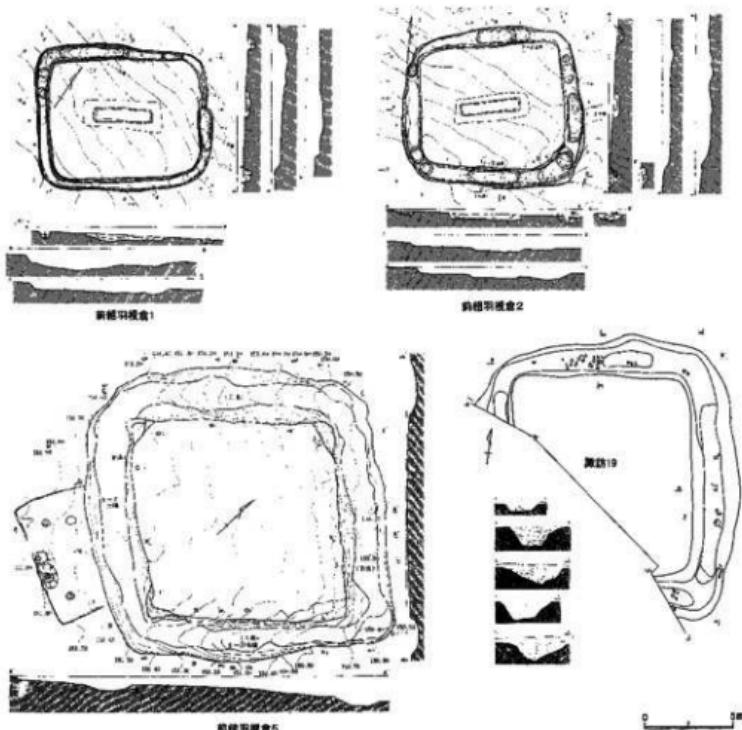
美里町塚本山遺跡（増田1977、第13図）では、盛土の遺存する周溝墓が2基調査されている。2号周溝墓は遺構の南東側が調査されたものである。全体の平面形は隅丸方形である。周溝は外周が不整形で、北東と南西の2箇所に陸橋部があり、調査された部分はL字形の平面形になっている。方台部は方形で、規模は未調査区も対称形であれば $13.8m \times 12.8m$ となる。盛土は方台部の東側に高さ約50cmで遺存し、方形の形状と考えられている。調査区内では主体部は検出されていない。周溝は南溝が広く幅3.6m、東溝が狭く幅3.0m前後で、深さ30cmほどである。溝の立ち上がりは方台部側が急で外周がなだらかである。遺物は南溝の溝底から器台が、東溝の溝底から小型壺が出土している。器種は壺・小型壺・器台である。時期は4期である。

14号周溝墓は遺構の西側が調査されたもので、盛土と主体部が遺存する。全体の平面形は西側が突出する不整な方形である。周溝は外周が不整で、南東のコーナーと西溝の中央の2箇所に陸橋部がある。方台部は若干歪んだ方形で、規模は $17.3m \times 14.4m$ である。盛土は方台部の中央に高さ約1mほど遺存する。主体部は方台部の中央に2基検出されている。規模は第1主体部が $3.7m \times 1.0m$ で深さ30cm、第2主体部は幅1.5mで長軸方向は不明である。周溝は西溝が極端に広く幅5.5m、その他の周溝は幅2.5~3.0m前後である。深さは北溝が浅く30cm、南溝が50cmほどである。遺物は主体部から鉄鏃と剣が、北溝から高坏・壺が出土している。器種は壺・高坏・台付壺である。時期は4期である。

神川町前組羽根倉遺跡（柿沼・書上他1985、第14図）は谷水田に面した児玉丘陵に立地している。主体部の検出されている周溝墓が2基、副葬品的な性格を持つ可能性がある鉄鏃を出土した周溝墓が1基調査されている。

1号周溝墓は東側に2・3号周溝墓がある。全体の平面形は長方形で、周溝は全周する。方台部は $6.7m \times 5.4m$ の長方形である。主体部は方台部中央に1基検出され、2基の溝中土坑からも玉が出土し、埋葬施設と考えられる。方台部中央の主体部は $3.4m \times 1.3m$ の長方形で深さは20cmほどである。棺部を更に $2.4m \times 40cm$ 、深さ8cm掘り下げている。周溝は北東溝が細く幅30cm、その他の溝は幅40~60cmで、溝中土坑のある部分は幅が広く70~80cmである。深さは北東溝が浅く10cm、その他の周溝は20~40cmである。溝中土坑は更に20cmほど掘り下げられている。溝中土坑は埋葬主体部である。遺物は方台部の主体部から鉄鏃が、北側の溝中土坑から碧玉製の勾玉が、東側の溝中土坑から滑石製の管玉が出土している。周溝からは南西のコーナーの溝底から鉢が出土しているのみである。時期は他の遺構との関係から3期と考えられる。

2号周溝墓は東側に3号周溝墓が南側に隣接し、1号周溝墓が西にある。全体の平面形は隅丸長方形で、周溝は全周する。方台部は $6.4m \times 5.5m$ の長方形である。主体部は方台部中央に1基検出されている。主体部は $3.3m \times 1.2m$ の長方形で、深さ20~30cmほどである。ローム土により $2.6 \times 0.5m$ の棺座が造られ、ローム棚となっている。周溝は北東・北西コーナーが細く幅30cm、その他の周溝は幅80cm前後で、溝中土坑のある部分は広く0.9~1.1mである。深さは北東・北西コーナーが浅く5cm、その他の部分は20~40cmで、溝中土坑は更に10cmほど掘り下げられている。溝底には北溝、東溝、南東コーナー、南溝に4箇所の溝中土坑が検出され、2~1~3土坑は施設の可能性が高い



第14図 児玉地域の良好な周溝墓(3) (各報告書より転載、S = 1 : 320)

ものである。その他にも細かな凹凸が認められる。遺物は上層から壺等の小破片が出土するのみだが、方台部の南西コーナー、南溝の溝中土坑付近から碧玉製の管玉と珠文鏡が表採されている。時期は他の遺構との関係から3期と考えられる。

5号周溝墓は主体部は検出されていないが、周溝から副葬品的性格を持つと考えられる鉄鎌が出土している。2・3号周溝墓が西側に、6号周溝墓が東側に隣接するものである。全体の平面形は若干歪んだ方形で、周溝は全周する。方台部は $13.4m \times 13.1m$ の若干歪んだ方形である。周溝は東溝の北東コーナー付近が細く幅1.5m、その他の周溝は幅2.5~3.2mである。深さは北東・北西コーナーが浅く20cm、その他の部分は40cmで底面は平坦である。遺物は北溝と南溝の溝底から若干浮いて鉄鎌が出土している。土器は上層から壺等の小破片が出土するのみである。時期は他の遺構との関係から3期と考えられる。

以下は、底部穿孔壺の出土により周溝墓と考えられるものである。

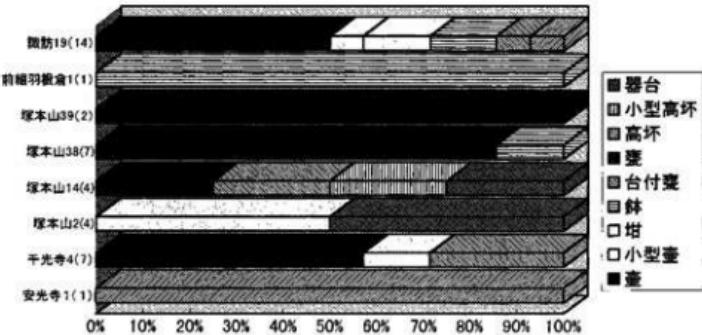
塚本山遺跡38号周溝墓は39号が西側に隣接するもので、北溝が幅広の不整な方形である。北溝の

中央に陸橋部を持つ。方台部は方形で、規模は14.4m×14.3mである。周溝は、北溝が溝の中央から東側にかけて広く幅4.0m、その他の溝は幅2.0~3.0mである。深さはコーナーが浅めで、中心に向かって深くなる。北溝の幅広の部分は一段深く60cm、南溝は40cmである。南溝には溝中土坑があり、施設の可能性が高いものである。溝の立ち上がりは方台部側がなだらかで、外周が急である。遺物は南溝の溝中土坑から遺棄された状態で壺が、北溝、西溝の溝底に接して壺・鉢が出土している。壺の内1点には焼成後の底部穿孔が施される。時期は4期である。

39号周溝墓は38号が東側に隣接するもので、遺構の東側が調査されている。東溝は幅広で外周の形態が不整である。方台部は方形で、規模は南北方向で14.1mである。周溝は東溝が溝の中央から北側にかけて広く幅4.0m、その他の溝は幅1.7~2.8mである。深さは北溝の幅広の部分が一段深いようだが断面が示されず不明である。北溝が40cm、南溝は30cmである。溝の立ち上がりは方台部側がなだらかで、外周が急である。遺物は、南溝の溝底に接して焼成後の底部穿孔壺が2点出土している。時期は4期である。

本庄市諏訪遺跡（柿沼・小久保1979、第14図）は本庄台地に立地する。19号周溝墓は全体の平面形が隅丸長方形で、陸橋部は調査区内では確認されていない。方台部は11.6m×10.9mの長方形である。周溝は北西コーナーが狭く幅60cm、その他の周溝は幅0.9~1.3mである。深さは北溝や各コーナーが浅く20cm、その他の部分は70cmほどである。底面は平坦である。周溝の立ち上がりは方台部側が急で、外周はなだらかである。遺物は各周溝から出土しているが、北溝に溝底に接するものがある他はいずれも上層から中層にかけて出土している。器種は壺、高杯、台付甕、壺、鉢である。壺の内1点には焼成後の穿孔が施されている。時期は5期である。

以上をまとめると、全体の平面形は方形が基調である。整った方形あるいは長方形と、隅丸の方形、万吉下原2号や塚本山の外周の形態が不整なものという3つに分けられる。陸橋部は安光寺1号が1辺が大きく開くもので、塚本山2号がコーナー2個所、塚本山14号が1辺の中央とコーナーの1個所、塚本山38号が1辺の中央に設けられている。それ以外は全周する。方台部の形態は、安



第15図 水玉地域の周溝墓出七土器の器種構成

光寺1号がやや隅丸だが、その他はいずれも整った方形、あるいは長方形である。方台部の規模(長軸)は最小の前組羽根倉2号の6.4mから最大の千光寺4号の15.8mまで10mほどの開きがある。大きさ6~7mの前組羽根倉1・2号、11.6mの諏訪19号、14~18mのそれ以外と3分できる。周溝の幅(最大)は、前組羽根倉の1・2号の30cmから塚本山2号の3.0mまで幅があり、80cm~1.5m、2.0m~2.7m前後のものが多い。深さ(最深)は、前組羽根倉2号の5cmから千光寺4号の1.5mまで幅があるがほとんどが50cmを下回り、30cm前後のものが多い。周溝内の施設は、溝中土坑が認められる他、千光寺4号では東溝に壺棺が検出されている。溝中土坑は前組羽根倉1・2号、塚本山38号のみだが、施設の可能性が高いものである。

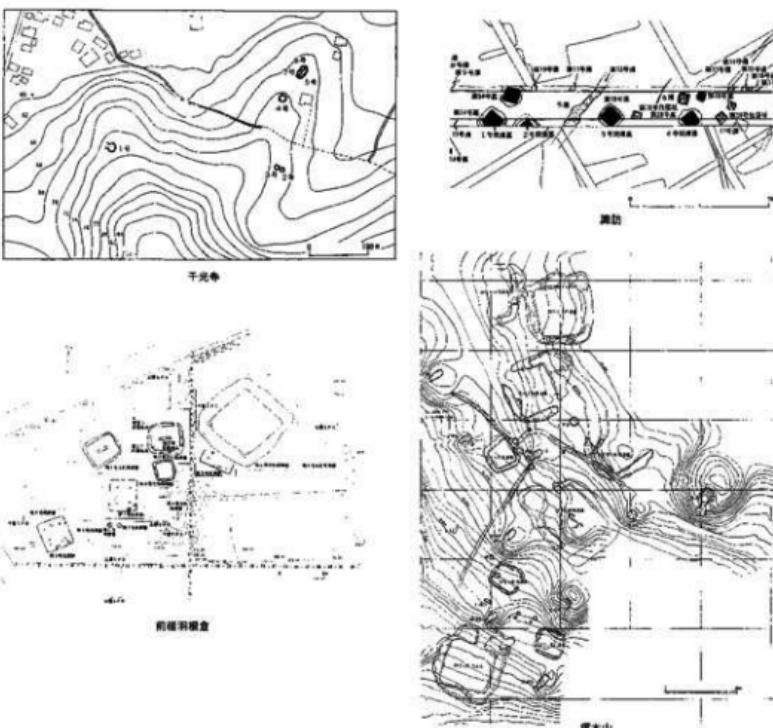
遺物量は多寡があり、器種も多様である。主体部が検出されたものでも前組羽根倉2・5号のように、土器が出土していないものもある。遺物量の多寡と周溝墓の規模の相関は不明瞭で、最も多くの遺物を出土した諏訪19号は中規模である。出土土器の器種(第15図)は、出土量が少ないこともあり不明瞭だが、壺が一定の割合を占めるようである。ここで見た児玉地域の例は4~5期にわたるが、時期による器種の偏りは不明確である。底部穿孔は塚本山38・39号、諏訪19号で認められる。全体に出土個体数の少ない塚本山39号を除いて、出土土器の1~2割程度である。出土状況は上・中層から出土する他、塚本山38号では溝中土坑から遺棄された状態で、千光寺4号、塚本山2・38・39号、諏訪19号では溝底に接して出土している。前組羽根倉1号では溝中土坑から碧玉製の勾玉と滑石製の管玉が出土している。土器は破片でも大型のものが多い。

**群在の様相(第16図)** 児玉・美里地域で周溝墓とされる遺構の群在の様相が分かる遺跡は、北から神川町前組羽倉遺跡、児玉町塩谷大塚遺跡(恋河内1990)、本庄市飯玉東遺跡(増田・駒宮1979)、本庄市諏訪遺跡(佐藤1989、増田1990)、本庄市下野堂遺跡(本庄市1976)、美里町塚本山遺跡、美里町神ヶ谷戸遺跡(美里町1986)、岡部町千光寺遺跡がある。多くは部分的な調査や概略図のみの公表であるため、ここでは確実な周溝墓を含み、3基以上の群の様相が分かる前組羽根倉遺跡、諏訪遺跡、塚本山遺跡、千光寺遺跡について、特に群在の様相に限って見ることにしたい。

前組羽根倉遺跡は周溝墓とされる遺構が6基調査されている。時期は土器が少なく不明瞭だが、3期と考えられる。2期の集落を壊して造られている。軸方位は東西方向の2・3号と北西-南東方向の1・4~6があり、前者は小型で、後者は1号を除き大型である。4・6号は平面プランの検出のみのため確実でないが、いずれも全周形と考えられる。築造は2つの群が一定の間隔を取りながら整然と行われたと考えられる。

諏訪遺跡は周溝墓とされる遺構が6基調査されている。時期は3~4期で、軸方向はいずれも南北方向である。築造は一定の間隔を取りながら整然と行われている。

塚本山遺跡は周溝墓とされる遺構が11基調査されている。時期は3~4期で継続した築造が考えられる。軸方位は南北方向の38・39号と、南西-北東方向の33号、南東-北西方向のそれ以外に分かれるが、陸橋部の開口方向を勘案すれば更に細分が可能である。軸方向は等高線に沿っており、地形的な制約も軸方向の決定要因になっているのが分かる。規模は南東-北西のものには大小があるが、それ以外はいずれも大型のものである。31・38・39号は近接しているが、それ以外は10mほどの間隔を置いて造られている。



第16図 児玉地域の周溝墓の群在の様相（各報告書より転載）

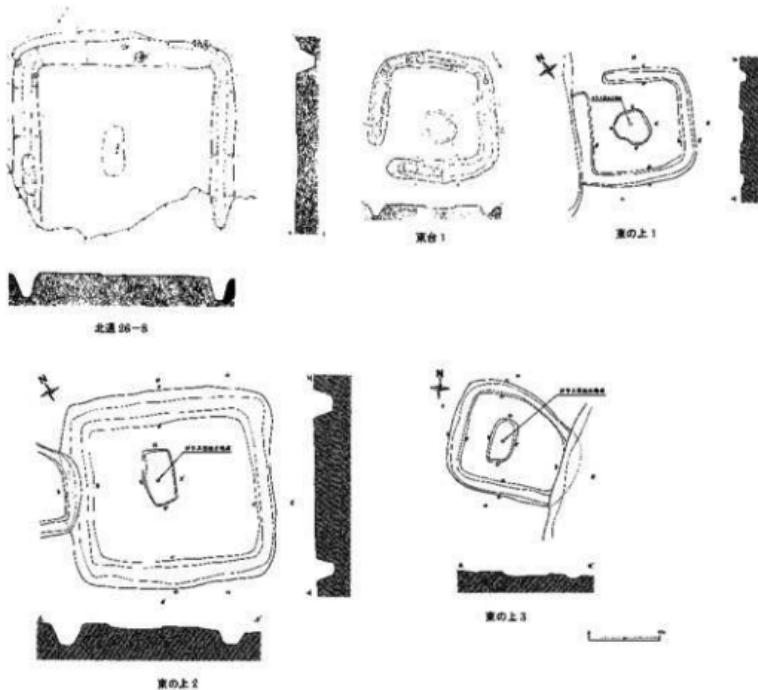
千光寺遺跡は、周溝墓とされる遺構が3基調査されている。時期は5期より後で、軸方向はいずれも北東-南西方向である。大きく大型の4号と小型の6・7号の2群に分かれ。6・7号は周溝が接して共有している。

#### (6) 武藏野台地の周溝墓

武藏野台地では、主体部の検出された富士見市北通遺跡、同東台遺跡、新座市新開遺跡、上福岡市椎現山遺跡、所沢市東の上遺跡、周溝から碧玉製管玉が出土した志木市西原大塚遺跡、底部穿孔壺が出土した三芳町本村南遺跡等の周溝墓が知られている。だが、大部分は部分的な調査であり、ここでは全容が報告されている富士見市北通遺跡と東台遺跡、所沢市東の上遺跡の例について見ることにしたい。

##### 個々の周溝墓

富士見市北通遺跡（高橋1987、第17図）は、柳瀬川の低地に南面する小舌状台地上に立地する。小支谷の対岸には大規模な環濠集落である南通遺跡がある。26地点8号周溝墓は遺構の北側が調査



第17図 武藏野台地の良好な周溝墓（各報告書より転載、S = 1 : 320）

されたもので、南側は土取りにより破壊されている。全体の平面形は方形で、調査区内では陸橋部は確認されていない。方台部は方形で、規模は東西方向で10.8mである。主体部は2.8×1.3mのやや不整な隅丸長方形で、深さは10cmほどである。周溝は幅1.2～1.7mで北側の張出しを含めると2.0mになる。深さは北溝が浅く1.0m、東・西溝は1.4mである。断面形は逆台形である。北溝の方台部側に高壙と壺を組み合わせた壺棺が、西溝には溝中土坑がある。溝中土坑について高橋氏は施設としては疑問を感じるとしている。壺棺は周溝がある程度埋没した段階で掘りこまれている。遺物は、主体部からガラス玉31点と鉄剣が出土している。周溝からは北溝中央の壺棺周辺の上層から焼成後底部穿孔の壺・器台・焼成前底部穿孔の鉢が、北西コーナーの中層から焼成後の底部穿孔壺が出土している。時期は2期である。

富士見市東台遺跡（会田1978、富士見市1986、第17図）は柳瀬川の低地に南面する水子支台の縁辺に立地する。

1号周溝墓は、全体の平面形が隅丸方形で、南北コーナーに陸橋部を持つものである。方台部は直線的な逆を持つ方形で、規模は5.8m四方である。主体部は周溝の軸方向に対して斜めの軸で設けられている。2.0×1.5mの不整な方形で、深さは15cmほどである。周溝は南溝が広く幅1.3m、その

他の溝は幅80cm～1.0mである。深さは40～70cmで、南溝、西溝に溝中土坑が認められる。断面形は逆台形である。遺物は、北東・北西コーナーの溝底から20cmほど浮いて焼成後の底部穿孔壺が出土している。時期は2期である。

所沢市東の上遺跡（柏谷・千葉1995、第17図）は柳瀬川の低地に臨む台地縁辺に立地する。方台部に主体部が検出された周溝墓3基が調査されている。

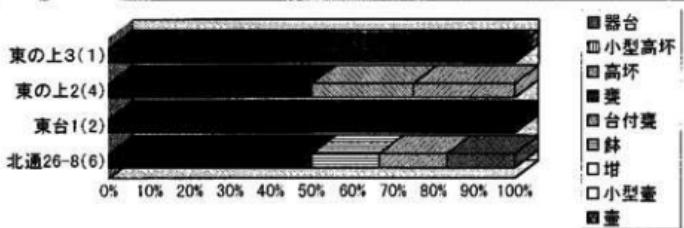
1号周溝墓は、2号周溝墓の東に接して造られている。全体の平面形は若干歪んだ方形で、方台部も同様の形態である。北西コーナーに陸橋部を持つ。規模は5.2m四方である。主体部は2.2m×1.8mの不整な円形で、深さは25cmほどである。周溝は幅80cm～1.0mで、深さ30～45cmである。底面はほぼ平坦である。断面形は逆台形である。覆土には若干の焼土、炭化物が含まれている。遺物は、主体部からガラス玉が5点出土している。周溝からの遺物は土器の小破片のみである。時期は他の遺構との関係から1期と考えられる。

2号周溝墓は、1・3号周溝墓に接して造られている。全体の平面形は若干歪んだ方形で、方台部も同様の形態である。周溝は全周する。規模は6.8×6.1mである。主体部は3.1m×80cmの不整な長方形で、深さは20cmほどである。周溝は北溝がやや広く幅2.0m、南溝が幅1.6m、南東コーナーが狭く1.0mである。深さは東溝が浅く70cm、北溝と西溝が深く1.2m、南溝が90cmである。底面はほぼ平坦である。断面形は逆台形である。覆土には若干の焼土、炭化物が含まれている。遺物は、主体部からガラス玉が9点、北東・北西コーナーの中層から焼成後の底部穿孔壺が各1点、南溝中央の中層から台付壺が出土している。時期は1期である。

3号周溝墓は、2号周溝墓の周溝を切って造られている。全体の平面形は歪んだ隅丸長方形で、方台部も同様の形態である。周溝は全周する。規模は4.1×3.4mで小型である。主体部は2.5m×1.4mの不整な隅丸長方形で、深さは25cmほどである。周溝は南・西溝がやや広く幅90cm、北溝が狭く幅40cmである。深さは25～40cmほどである。底面はほぼ平坦である。断面形は逆台形である。覆土には若干の焼土、炭化物が含まれている。遺物は、主体部からガラス玉が2点、南西コーナーの中層から壺が1点出土している。時期は1期である。

以上をまとめると、全体の平面形は方形と隅丸方形、長方形があるが、いずれも直線的な辺を持つ整った方形・長方形である。陸橋部は周溝が全周するものか、コーナーの一つが陸橋部になるものである。方台部の規模（長軸）は北通26-8号が最大で10.8m、それ以外は4～7mで小型である。周溝の幅（最大）は、東の上2号の2.0m、北通26-8号の1.7mと、それ以外に2分できる。深さ（最深）は、東の上2号の1.2m、北通26-8号の1.4mと、40～70cmのそれ以外に2分できる。周溝内の施設は、北通26-8号で壺棺と溝中土坑が、東台1号で西・南溝に溝中土坑が認められる東台1号南溝のものは施設の可能性が高いが、その他は不明である。

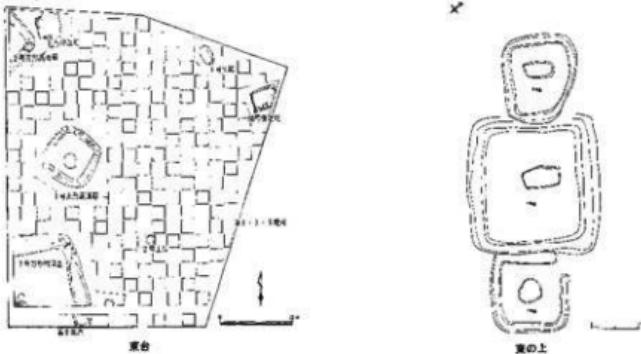
遺物量は全体的に少なく、東の上1号では出土していない。遺物量は最大規模の北通26-8号が最も多いが内2点は壺棺のため、規模との相関は疎断できない。出土土器の器種（第18図）は、壺がほぼ半数を占めるようである。底部穿孔は、北通26-8号、東台1号、東の上2号で認められる。北通26-8号の鉢を除いていずれも焼成後穿孔である。穿孔率は全体の出土量が少ないため不明瞭だが、北通26-8号では3割程度である。出土状況は、北通26-8号、東台1号、東の上2号で底



第18図 武藏野台地の周溝墓出土土器の器種構成

部穿孔壺がコーナーから出土している。北通26-8号では壺棺の埋葬後に周辺に土器が置かれたとされている。出土土器はいずれも完形に近く、破片でも大型のものである。

**群在の様相（第19図）** 武藏野台地で周溝墓とされる遺構群が検出された遺跡は、北から上福岡市権現山遺跡（笛森1983・1984・1986）、富士見市東台遺跡、北通遺跡（今橋ほか1975、小出1978・1989）、志本市西原大塚遺跡（尾形1990、佐々木1991・1998）、向山遺跡（照林1986）、新座市新開遺跡（酒井1987、斯波1989）、所沢市東の上遺跡、宮前遺跡（飯田1986）等である。ここでは確実な周溝墓を含み、3基以上の群在の様相が分かる東台遺跡、東の上遺跡について、特に群在の様相に限って見ることにしたい。



第19図 武藏野台地の周溝墓の群在の様相（各報告書より転載）

東台遺跡では周溝墓が3基調査されている。いずれからも底部穿孔壺が出土している。時期は2期で、軸方位は北東—南西方向の1・2号と、北西—南東の3号の2方向がある。いずれも10mほどの間隔を空けて築造されている。

東の上遺跡では周溝墓とされる遺構が3基調査され、いずれからも主体部が検出されている。時期は1期である。2号を中心にして東西に1・3号が、連接して築造されている。

権現山遺跡、西原大塚遺跡、向山遺跡、新開遺跡も全容は明らかでないが、方台部が切り合うようなことはなく、整然とした築造である。

#### (7) 台地の周溝基の様相

ここでは、低地の様相と対比するために、台地の良好な周溝基の個々の要素と群在の様相についてまとめておきたい。

**全体の平面形** 関東1号、篠山4号、万吉下原4号、塚本山14・38・39号は方形を基調とするものの外周は不整である。特に塚本山14号は陸橋部の片側が異様に拡幅され、陸橋部が方台部に対して斜めに取り付く格好になっている。また、井沼方12号は円形に近い隅丸方形である。その他のものは比較的直線的な辺の方形・長方形である。薬師耕地前7号、関東6・8号では一定方向に周溝が接続することによる「拡張」が見られる。薬師耕地前7号では拡張に対する埋葬主体部が認められる。

**方台部** 井沼方12号が隅丸方形である以外は、若干歪む例はあるが整った正方形、長方形、台形である。

**陸橋部** 全周のもの(21例)が最も多い。次いでコーナーの一つが陸橋部になるもの(9例)が多い。四隅切れるものは観音寺4号、一辺の中央が陸橋部になるものは塚本山14・38号である。また、L字状で二隅が切れるものや一辺の2箇所が切れるものも認められる。

**周溝の幅と深さ** ある程度規模の大小と周溝の様相に相関があり、規模が大きいものが幅が広く深く、小さいものは細く浅い傾向がある。ただし上太寺の周溝は細く浅く、概には言えないようである。

**施設** 溝中土坑、テラス、段が認められる。溝中土坑は関東6・8号、井沼方7・10号、下道添9・13号、塚本山38号、前組羽根倉1・2号、北通26-8号、東台1号で認められる。この内施設の可能性が高いものは井沼方10号、下道添9号、塚本山38号、前組羽根倉1・2号、東台1号である。前組羽根倉1号では、管玉、勾玉が出土し、埋葬主体部と考えられる。下道添9号、塚本山38号は土器が出土している。井沼方1・4・7~10号は底面が焼土化している。テラスは篠山4号、下道添2号、万吉下原2号で認められる。不整形の下道添2号を除き、周溝を拡張するように周溝の外周に広く取り付くものである。また、全く施設が存在しないものもある。

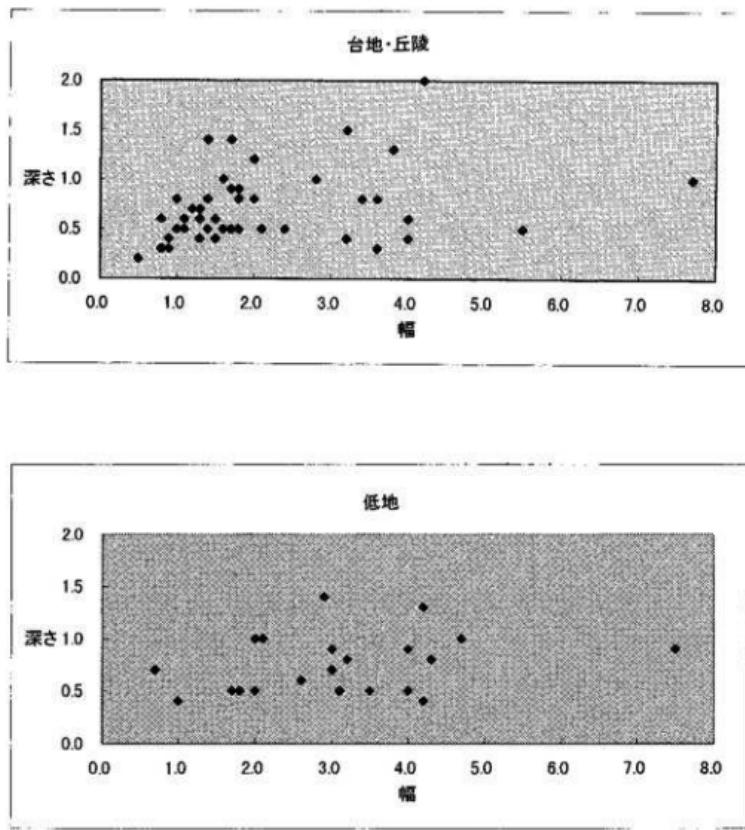
**遺物量** 全体的に少なく、10点以上出土しているのは篠山4号、下道添9・13号のみである。規模の大小との相関は不明瞭である。

**器種構成** 時期に関わらず壺の優位性が認められる。遺物量がある程度あって壺の比率が低いのは下道添9号のみである。台付壺、高环が一定の割合を占める例が認められる。

**底部穿孔壺の出土比率** 全体の出土量が少ないものは割合が高いが、それ以外は5~30%前後が多い。規模との相関関係はないようである。

**出土状況** 多様だが、大宮台地・江南台地・武蔵野台地ではコーナーや陸橋部からの出土例が多く、比企・児玉地域では特定の周溝からの集中した出土が見られる。ほとんどのものが完形率の高いものである。

**群在の様相** 整然とした様相で、大部分のものが一定の間隔を置いて築造されている。周溝が重複する例はなく、接するか共有する程度である。薬師耕地前7号、関東6・8号では一定方向に周溝が接続することによる「拡張」が見られる。



第20図 周溝の幅と深さの関係

### 3. 低地の周溝墓と台地の周溝墓

以上、埼玉県内の低地と台地の良好な周溝墓について概観した。ここでは、低地の様相と比較する。

**全体の平面形** 方形を基調とするが、入西遺跡群や台地のいくつかの例では外周の形態が不整である。広面 SZ9 の外周形は円形に近い。また、井沼方12号や下大久保新田1号、鴻池1号は隅丸方形である。整った方形とそれ以外というように分けられるようである。

**方台部の形態** 台地・丘陵のものは井沼方12号を除き、全て直線的な辺を持つ方形、長方形、台形である。低地でも入西遺跡群をはじめ大部分のものが同様のものである。だが、その一方で低地のものには下大久保新田1号、鴻池1号のように隅丸方形や各辺がかなり丸みを帯びたものが見られ

る。直線的な辺の大部分のものと、曲線的な辺の一部があると言つていいだろう。

**規模** 低地、台地、丘陵で差はなく、塚本山14号の17.3mから東の上3号の4.2mまで幅がある。およそ5~8mの一群と、10~15mの一群に2分できる。後者を更に10~12m、14~16mに分けられる可能性もある。

**陸橋部** 低地、台地、丘陵に関わらず、周溝が全周するものが最も多く、次いでコーナーの一つが切れる形態のものが多い。L字形のものも低地、台地双方に認められる。比企地域、入西遺跡群では四隅切れるものが多い。2期までのものが多く、5期には見られない。一辺の中央が切れるものは、下大久保新田1号、広面SZ9・21、塚本山14・38号で見られる。塚本山14号は南東側にもう1個所陸橋部がある。広面SZ9、塚本山14号は方台部に対して斜めに陸橋部が取り付く。いずれも4期のものである。また、一辺の2箇所が切れるものも見られ、遺存状況とも関わるのだろうが、全周、コーナーの一つが切れるもの以外は様々である。

**周溝の幅と深さ** 台地・丘陵のものと入西遺跡群のものには規模と幅の相関がある程度認められる。深さについては遺存状況とも関わるのだろうが、明瞭な関係は認められない。荒川低地のものは幅に対して深めのものが多い。周溝の幅と深さの関係を図化したのが第20図である。巨視的に見ると幅1m以上4m以下、深さ50cm~1mのほぼ同様の分布と考えられるが、台地・丘陵では幅1~2m、深さ50cm~1mに特に集中した分布が見られる。断面形は逆台形のものが最も多く、入西遺跡群では方台部側の立ち上がりが急なものが多い。逆に塚本山の例では外周の方が急である。

**施設** 壺棺、溝中土坑、テラス、段が認められる。壺棺は台地・丘陵のみで出土している。溝中土坑は台地・丘陵、荒川低地で施設と考えられるものが認められるのに対して、入西遺跡群では施設と考えられるものは認められない。テラスは台地・丘陵のものが周溝の外周を拡張するように広範囲に巡らされるのに対して、低地のものは稻荷前C区1号で同様のものが見られる他は周溝の施設として設けられている。段については台地・丘陵、低地のいずれにも認められる。また、全く施設が認められないものも存在する点も注意を要するだろう。

**土器** 出土点数のみを比較すると低地のものの方が多い傾向がある。台地・丘陵のものが10点を超えるのが稀であるのに対して、低地ではほとんどのものが10点を超え、下大久保新田では54点、蜻蛉3号で33点、中耕SR21で80点、中耕SR41で40点、鴻池1号で38点に上っている。台地の例でこれに匹敵するのは下道添13号の53点のみである。時期的には2・3期以後のものが点数が多い傾向が認められる。

出土土器の器種は、台地・丘陵、荒川低地で壺が半数近くを占めている。これに対して、入西遺跡群では、広面SZ9、中耕SR13・41、稻荷前C区1号では壺の比率が高いが、その他は小型壺の比率も高く、壺+小型壺が大きな割合を占めているといつていいだろう。東川端1号でも同様の様相が認められる。また、低地では器台が一定の割合を占めているが、台地・丘陵ではそれほど多くないようである。

底部穿孔は台地・丘陵で周溝墓1基の出土点数に対して5~30%の割合に認められる。低地でも入西遺跡群では2~3割に認められる。これに対して、荒川低地では5~10%と比率が低い。

**出土状況** 大宮台地・江南台地・武藏野台地ではコーナーや陸橋部際から、比企地域・児玉地域で

は特定の周溝からの集中した出土が見られる。入西遺跡群も比企地域同様である。これらの地域の出土土器は完形率の高いものがほとんどである。これに対して荒川低地では、台地・丘陵と共通する様相に加えて南町1号、姫塙3号のように細片が大量に出土するものが見られる。

**群在の様相** ほとんどの遺跡で整然とした築造が行われ、重複する場合にも周溝が接するか共有する状況である。入れ子状、知恵の輪状の重複が見られるのは、荒川低地の大久保領家片町、鍛冶谷・新田口の両遺跡の一部のみである。

#### 4. 周溝墓の条件—完璧な周溝墓の非在一

3で低地と台地の周溝墓の様相について見たわけだが、低地と台地・丘陵で全く様相が異なるわけでもないようである。埋葬主体部、副葬品的遺物、方台部の盛り土、底部穿孔壺という項目を外した場合、どれほど共通項、周溝墓認定の条件を見出せるであろうか。まず、全体の平面形については方形を基調とするものの不整なものが多く、多様であり、不適当である。方台部の形態は直線的な辺を持つ方形、長方形が多く、ある程度の目安とできそうである。ただし、一方で曲線的な辺を持つものが少數あることには留意する必要がある。規模は多様で目安にはならないだろう。陸橋部については全周あるいはコーナーの一つに陸橋部を持つものが最も多く、比企地域では四隅切れのものが多い。これも一定の目安にできそうである。一方、L字形や、一辺の中央に陸橋部を持つもの、一辺の2箇所が切れるもの等がある点には留意する必要がある。周溝の幅と深さはある程度まとまった分布を示しているが、これが目安となるかは比較する対象が必要である。施設は、施設としての溝中土坑が低地、台地双方で認められ、一つの目安とできそうである。ただし、入西遺跡群ではほとんど認められない点は注意を要する。遺物は壺の多さが特徴的で、目安の一つになるだろう。ただし、入西遺跡群では壺+小型壺、低地部では器台が一定の割合を占めるというようの一括りにはできない。出土土器は完形率の高いものが多く、一つの目安となりそうである。一方荒川低地では破片が多く、留意する必要がある。出土状況はコーナーや陸橋部際、特定の周溝からの出土が見られるが、そうでない場合も多い。群在の様相は低地・台地とも整然とした築造がほとんどで、これも目安の一つとできるであろう。鍛冶谷・新田口、大久保領家片町の両例では、整然とした部分とそうでない部分が混在している点は注意を要する。

このように、①直線的な辺を持つ方台部、②周溝が全周あるいはコーナーの一つに陸橋部を持つ、四隅切れの平面形、③施設としての溝中土坑、④壺の出土比率の高さ、⑤出土土器の完形率の高さ、⑥コーナーや陸橋部際、特定の周溝からの出土、⑦整然とした群在のあり方をある程度の目安とできそうである。また、周溝の幅と深さの関係も比較次第では意味を持つ可能性がある。

しかし、一方で全てのものに留意点が併記される状況であることは重要である。また、一つの目安を満たしたとしても、全てを満たすものは存在しないし、仮に存在したとしても一方に何らこれらの目安を満たさないものがあることを覆い隠せるものではない。周溝墓を認定する絶対的な条件は設定できないわけである。伊丹徹氏が大場磐雄博士の宇津木向原遺跡での所見をもとに設定した周溝墓の諸条件（伊丹1992）が、現在無効であることについては伊藤敏行氏が既に発表されている。（註4）

筆者はかつて方形周溝墓が死者儀礼の総体的装置であるという視点から、いくつかの小論を提出してきたが、その中で繰り返し述べてきたように、周溝墓は多くの要素から構成され、いくつかの要素が互いに複合して1基が形作られ、基として機能している。あるものにある要素があるものにはないということがまま見られる。つまり、全ての要素を合わせ持つもの一完整な周溝墓など存在しないし、全く同じものなど存在しないのである。今回の作業を通して、そのことがより一層鮮明になった。従って要素をいくら羅列しても、目安は提示できても周溝墓の条件とはなり得ない訳である。その目安すら、様々な留意点が付く揺れ動く、曖昧なものである。この曖昧さは、周溝墓の諸要素が共同体内で閉じたものではなく、土器同様に様々なレベルで交流し、交換が繰り返されることによって重層的な差異が生み出された結果といえよう。周溝墓を一律の社会的な秩序に従って厳密に規格化された定型的な墓制であるかのような、典型例が実際に存在するかのような考え方では、この状況について何ら説明する手段になり得ない。忘れてはならないのは、「周溝墓」という「墓制」は我々が創造したものである点である。弥生時代・古墳時代に「方形周溝墓」があったわけではなく、単なる墓でしかないことをもう一度思い出す必要がある。この曖昧で揺れ動く目安は、当時の墓造りに求められた基準の曖昧さ、死者儀礼のあり方の曖昧さを示すものである。それを承知で考え始めなければならない。そのためには、1つの墓として機能している周溝墓のある時期の具体的な例を積み重ねる必要がある。その相互の対比によってのみ、様々な検討が可能に、副題にあげた方形周溝墓とは何か、いかなる墓であるか、いかなる構造を持つかを探ることが可能になると考えられる。周溝墓の曖昧さを何か他の厳密なものに置き換えるのでなく、整理し検討することが重要と思われる。

本稿での作業はその第1歩である。

## 5、小 結

以上埼玉県内の良好な周溝墓について概観し、周溝墓を認定するためのある程度の目安を抽出した。また、周溝墓の条件の非在と、周溝墓とは何かを考えるために必要な作業について、筆者の考えを示した。

埼玉県内の様相については、山川守男、柿沼幹夫両氏の論考に詳しく述べられている（山川ほか1996、柿沼1996）。本稿のほとんどの部分が既に指摘されるといっていいだろう。ただし、両氏の論考では今回問題にしている低地の例全てが自明の周溝墓として検討されていることから、再検討の必要もあり、重複を知りつつ検討した次第である。併読をお勧めしたい。

また、主体部や盛土については周溝墓を抽出する手立てとしたため今回は検討していない。改めて検討したいと考えている。

(3)では、低地の建物跡について概観し、周溝墓との相違を探り、具体的ないくつかの遺跡について検討を試みる。

その際にはやはり建物跡であると認定する目安が必要になるだろう。何か一つの周溝墓の要素が欠落していることを取り上げても、本稿で述べてきた曖昧な様相を見ても明らかのように、それが周溝墓でないと根拠にはならないのである。他の何かであると認定する目安を示す必要がある。

3で示した目安と他の遺構であるとする目安とを用いて、更に様々な場合があることを加味して検討することにしたい。

### 謝辞

本稿は低地の周溝墓と建物跡を検討するための基礎的な部分であるが、計らずも周溝墓とは何かを考える機縁を得ることができた。その意味でも、飯島義雄氏と及川良彦氏には感謝したい。本稿を含む内容の一部については方形周溝墓研究会で報告させて頂いた。その際に、飯島氏、及川氏をはじめ、杉崎茂樹、伊丹徹、青木一男、伊藤敏行、立花実、池田治、小泉範明、長瀬出の各氏にご意見、ご教示を頂いた。また、柿沼幹夫、秦野昌明、小野美代子、宮井英一、松本完、石坂俊郎、恋河内昭彦、松井一明、黒坂慎二、新屋雅明、田中広明、上野真由美、戸下文子、田中由美子、島祥子の各氏にご教示とご協力を頂いた。未筆ではあるが、以上の方々に感謝申し上げたい。

(1998年1月28日記)

### 註

- (1) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団が調査。玉体部のある周溝墓4基を含む6基が調査されている。1基の主体部からガラス玉が出土している。担当の小野美代子、新屋雅明両氏からご教示頂き、実見した。
- (2) 下道跡では細片まで全て実測されており、他の例よりも多目的数値が出ていると思われる。
- (3) 下道跡では比率が低いが、註2の影響の可能性もある。
- (4) 1998年9月26日の法政考古学会で、「方形周溝墓研究の現状と課題」と題する発表があった。発表については、伊藤敏行氏、杉崎茂樹氏にご教示頂いた。

### 引用・参考文献

- 赤石光賀 1978 「薬師耕地前遺跡」上尾市文化財調査報告第4集 上尾市教育委員会
- 1979 「殿山古墳・殿山遺跡」上尾市文化財調査報告第6集 上尾市教育委員会
- 新井 端 「江南村内遺跡群Ⅰ」江南村教育委員会
- 飯島義雄 1998 「古墳時代前期における「周溝をもつ建物」の意義」『群馬県立歴史博物館紀要第19号』P65~78 群馬県立歴史博物館
- 飯田充晴・船谷吉一 1986 「田宮前遺跡の調査」『御瀬川流域遺跡群(IV)』P 6~27 所沢市文化財調査報告書第18集 所沢市教育委員会
- 伊丹 勤 1992 「相模の方形周溝墓を取り巻く諸問題」『東海大学校地内遺跡調査報告3』 P 86~91 東海大学校地内遺跡調査会・東海大学校地内遺跡調査委員会
- 出崎康行・富沢一明 1992 「大里村船木遺跡の調査」『第25回遺跡発掘調査報告会発表要旨』P 10・11 埼玉考古学会
- 今橋浩一ほか 1975 「針ヶ谷北通遺跡発掘調査報告書」埼玉県遺跡調査会報告第26集 埼玉県遺跡調査会
- 植木弘・植木智子 1987 「行司免遺跡-遺構図版編-」嵐山町遺跡調査会報告3 嵐山町遺跡調査会
- 1988 「行司免遺跡一本文編」嵐山町遺跡調査会報告4 嵐山町遺跡調査会

- 1988 「行司免遺跡—遺物図版編—」嵐山町遺跡調査会報告5 嵐山町遺跡調査会
- 大谷 徹 1998 「小村田西／小村田／関東」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第229集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 大宮市 1968 「大宮市史第1巻考古編」
- 尾形利敏 1990 「志木市遺跡群II」志木市の文化財第14集 志木市教育委員会
- 奥村恭史・秦野昌明 1989 「中里前原北遺跡・上太寺遺跡」与野市文化財調査報告書第13集 与野市教育委員会
- 及川良彦 1998 「関東地方の低地遺跡の再検討—弥生時代から古墳時代前半の「周溝を有する建物跡」を中心に—」  
『青山考古第15号』青山考古学会
- 柿沼幹夫・書上元博 1985 「神川村前綱羽根倉遺跡の研究」「紀要12」P 1~162 埼玉県立博物館
- 柿沼幹夫・小久保徹 1979 「下田・蕨跡」埼玉県遺跡発掘調査報告書第21集 埼玉県教育委員会
- 柿沼幹夫 1996 「北関東①埼玉県」関東の方形周溝墓」P 247~318 同成社
- 柏谷吉一・千葉裕之 1995 「第53次・54次調査 東の上遺跡」所沢市埋蔵文化財調査報告書第3集 所沢市教育委員会
- 木村俊彦 1986 「潜川町新井・打越遺跡の調査」「第19回遺跡発掘調査報告会発表要旨」P 14・15 埼玉考古学会
- 恋河内昭彦 1990 「塩谷下大塚遺跡」児玉町文化財調査報告第11集 児玉町教育委員会
- 小出輝雄 1978 「富士見市中央遺跡群I」文化財報告第15集 富士見市教育委員会
- 1989 「富士見市遺跡群VII」文化財報告第39集 富士見市教育委員会
- 江南町 1995 「江南町史資料編1 考古」
- 駒宮史朗・山川守男ほか 1991 「万吉下原遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査報告第18集 埼玉県教育委員会
- 佐々木保俊 1991 「志木市遺跡群III」志木市の文化財第16集 志木市教育委員会
- 1998 「西原大塚の遺跡」志木市遺跡調査会
- 笹森紀巳子 1988 「森山遺跡」「中里遺跡・篠山遺跡」大宮市遺跡調査会報告別冊4 大宮市遺跡調査会
- 若森健一 1983 「埋蔵文化財の調査(V)」郷土史料第29集 上福岡市教育委員会
- 1984 「埋蔵文化財の調査(VI)」郷土史料第30集 上福岡市教育委員会
- 1986 「埋蔵文化財の調査(VII)」郷土史料第32集 上福岡市教育委員会
- 佐藤好司 1989 「諏訪遺跡・久城前遺跡(B地点)発掘調査報告書」本庄市埋蔵文化財調査報告第15集 本庄市教育委員会
- 斯波 治 1989 「新開遺跡第3地点発掘調査報告書」 新座市遺跡調査会
- 大瀬八郎・柳田敏司 1952 「弥生時代縦穴住居跡発掘及び復元報告書」「埼玉文化月報56号」 埼玉県立文化館
- 高橋 敦 1987 「針ヶ谷遺跡群」富士見市遺跡調査会調査報告第27集 富士見市遺跡調査会
- 照林敏郎 1995 「朝霞市向山遺跡の調査」「第28回遺跡発掘調査報告会発表要旨」P 14・15 埼玉考古学会
- 新座市 1987 「新座市史第5巻 通史編」
- 浜野一重ほか 1984 「向原・上新田・西浦」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第41集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 坂野和信 1987 「下道添遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第67集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 福田 圭 1991 「清中土壤小考」「研究紀要第8号」P 9~36 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 富士見市 1986 「富士見市史 資料編2 考古」
- 本庄市 1976 「本庄市史 資料編」
- 増田逸郎・市川修 1975 「千光寺」埼玉県遺跡調査会報告第27集 埼玉県遺跡調査会

- 増田逸郎・小久保徹 1977 『塙本山古墳群』埼玉県遺跡発掘調査報告書第10集 埼玉県教育委員会
- 増田逸郎・駒宮史朗 1979 『雷電下・坂玉東』埼玉県遺跡発掘調査報告書第9集 埼玉県教育委員会
- 増田逸郎 1981 『清水谷・安光寺・北坂』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第1集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 増田一裕 1990 『源訪・久城前・久城往来北遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第17集 本庄市教育委員会
- 宮島秀夫 1995 『銅劍・鉄劍出土の方形周溝墓 観音寺遺跡4号方形周溝墓』『比企丘陵剖刊号』P75~85 比企丘陵文化研究会
- 美里町 1986 『美里町史 通史編』
- 村田健二 1981 『古津根岸裏遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第37集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 柳田博之・小倉均 1994 『井沼方遺跡発掘調査報告書(第12次)』浦和市遺跡調査会報告書第185集 浦和市遺跡調査会
- 会
- 山川守男・福田聖・坂本和俊 1996 『埼玉県の方形周溝墓』『関東の方形周溝墓』P97~119 同成社
- 山田尚友 1987 『井沼方遺跡(第8次)発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書59集 浦和市遺跡調査会

第1表 埼玉県における台地・丘陵の良好な周溝墓

遺跡名	遺構No.	平面形	深度(m)	方合部形	周幅(m)	周溝幅(m)	深さ(m)	盛土	穿孔数	施設	時期	古名
新緑地森	2	方形	全周	方形	8.1	8.1	1.4	2.0	0.6	0.8	無	0
	7-1	方形	1-隅	方形	5.2	5.2	0.8	1.5	0.3	0.6	無	37.5
	7-2	長方形	全周	長方形	8.2	5.2	1.1	1.5	0.3	0.6	無	—
上太寺	1	長方形	2-隅	長方形	12.0	10.3	0.6	1.7	0.2	0.5	無	—
	2	長方形	2-隅	長方形	11.3	8.0	0.8	1.3	0.3	0.6	無	0
圓窓	1	長方形	1-隅	長方形	19.7	7.9	2.3	3.4	0.2	0.8	無	33.3
	4	長方形	全周	長方形	5.7	4.6	0.7	0.8	0.2	0.3	無	0
	6	長方形	全周	長方形	6.2	4.6	0.6	0.9	0.1	0.3	無	0
	8	長方形	1-隅	長方形	5.4	4.4	0.6	0.9	0.1	0.3	無	0
櫻山	2	方形	1-隅	—	12.0	—	2.5	3.2	1.0	1.5	無	33.3
	4	不整方形	全周	不整長方形	9.1	8.2	1.6	2.6	0.4	1.0	無	0
	5	方形	2-隅	方形	5.7	5.7	0.5	0.8	0.2	0.3	無	0
	7	長方形	全周	長方形	9.3	7.4	0.8	1.4	0.4	0.8	無	16.6
井沼方	4	長方形	1-隅	圓丸方形	7.3	—	0.4	1.7	0.1	0.5	無	0
	7	圓丸方形	1-隅	圓丸方形	—	—	—	—	—	—	無	1期 生住部
向原	8	方形	2-北溝	方形	5.5	—	0.4	1.0	0.1	0.8	無	0
	9	台形	1-隅	台形	10.5	9.9	1.0	1.4	1.0	1.4	無	0
大宮公園	10	長方形	2-東	長方形	11.3	6.6	0.4	1.6	0.3	1.0	無	50
	11	長方形	—	長方形	8.4	—	0.9	1.2	0.4	0.7	無	75
	12	円形	—	円形	3.5	—	0.4	0.5	0.1	0.2	無	0
坂音寺	1	方形	—	方形	9.4	—	1.3	1.5	0.2	0.4	無	14.3
	4	方形	(四隅)	方形	—	—	1.8	—	0.4	0.9	無	0
行刑場	1	圓丸長方形	馬蹄	馬蹄	9.1	7.4	0.6	1.0	0.2	0.5	無	0
	3	長方形	全周	長方形	8.0	6.4	1.0	1.6	0.5	—	無	40
下道歩	5	長方形	全周	長方形	10.6	9.3	1.8	2.4	0.5	—	無	100
	8	長方形	1-隅	圓丸方形	8.3	6.6	0.8	1.1	0.5	—	無	100
櫻谷	7	長方形	全周	長方形	7.7	6.4	0.8	1.4	0.3	0.5	無	50
	8	長方形	2	長方形	11.8	9.3	1.2	2.1	0.2	0.5	無	0
圓丸方形	25	方形	—	方形	8.2	—	1.6	—	0.3	0.5	有	0
	2	圓丸方形	全周	圓丸方形	15.2	—	2.3	7.7	0.4	1.0	無	19 テラス、段
万台下原	9	方形	?	方形	11.2	—	1.8	—	0.2	0.5	無	20 土坑
	12	台形	全周	台形	16.4	—	2.2	3.8	0.6	1.3	無	5.7 土坑
安佐寺	2	圓丸方形	全周	圓丸方形	11.2	10.4	2.0	3.6	0.5	0.8	有	0
	4	方形	全周	方形	12.6	11.7	1.4	1.8	0.5	0.8	有	25 テラス、段
光光寺	1	圓丸方形	1-隅	圓丸方形	10.8	11.6	0.8	1.3	0.2	0.4	有	0
	4	方形	全周	方形	15.8	14.4	2.7	4.2	1.5	2.0	有	0
坂本山	2	圓丸方形	?	方形	13.6	12.8	3.6	3.6	0.3	—	有	0
	14	不整方形	2	方形	17.3	14.4	2.5	5.5	0.3	0.5	有	0
38	不整方形	1-中央	方形	14.6	14.3	2.0	4.0	0.4	0.6	無	14.5 土坑	
	39	不整方形	—	方形	14.1	—	1.7	4.0	0.3	0.4	無	100
前綱羽根金	1	長方形	全周	長方形	8.7	5.4	0.3	0.8	0.1	0.6	無	0
	2	圓丸長方形	全周	圓丸長方形	8.4	5.5	0.3	1.1	0.05	0.5	無	0 土坑
40	5	方形	全周	方形	13.4	13.1	1.5	3.2	0.2	0.4	無	0
	19	圓丸長方形	—	長方形	11.6	10.9	0.6	1.3	0.2	0.7	無	7.1 5期
北浦	8	方形	—	方形	10.8	—	1.2	1.7	1.0	1.4	無	33.3 安住、土坑
	1	圓丸方形	1-隅	方形	5.8	5.8	0.8	1.3	0.4	0.7	無	100 土坑
東の上	1	方形	1-隅	方形	5.2	5.2	0.8	1.0	0.3	0.5	無	0 1期 生住部
	2	方形	全周	方形	6.8	6.1	1.0	2.0	0.7	1.2	無	50 1期 生住部
	3	圓丸長方形	全周	圓丸長方形	4.3	4.1	0.4	0.9	0.3	0.4	無	0 1期 生住部

## 研究紀要 第15号

1999

平成11年3月25日 印刷

平成11年3月31日 発行

発行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 大里郡大里村船木台4丁目4番地1

☎0493-39-3955

印刷 朝日印刷工業株式会社